

海軍中佐秋山真之

海軍基本戰術

第二編

(注)

本史料は元々藤田尚徳氏（海兵二十三期、海軍大学校第十期将校科甲種学生）の所蔵であった原本からのコピーに基づきテキスト起こしをしたものです。

同原本には秋山真之の講義速記に校正及び推敲が加えられておりますので、これらを出来るだけ忠実に反映する如く務めました。

なお、本文中の（赤字）の箇所は戸高一成編『秋山真之戦術論集』（中央公論新社）によるもの（明治三十九年二月版とされるものを基に戸高氏自身の手による修正・補正を含む）で本史料とは異なる部分であり、これに対して逆に緑字の箇所は藤田氏の原本に基づくもので戸高氏編集版とは異なる部分です。研究者の参考として明示いたしました。

平成二十四年九月九日

HP 『海軍砲術学校』管理人 桜と錨

## 海軍基本戦術 二編

## 戦法

前編に於て戦術の基礎たる各種の要素、即ち戦闘力の要素、戦術単位の本能、艦隊の隊制、艦隊の隊形、艦隊の運動法等に就き其戦術に及ぼす利害得失を逐次に講述せり今是より戦術の本領たる戦法に説及せんとす而して其前提として先づ兵(其)理の一斑を討究せざる可からず是れ兵理は戦略と戦術との(に)別(つ)なり一般兵術の原因をなし諸多の兵術原則は之より発生するを以てなり、又戦法を説くにあたり近世諸兵家の流儀に倣ふとき或は兵器に基きて之を砲戦術水雷戦術及衝角戦術等に種別し或は又地理に依りて海洋戦術海岸戦術対要塞戦術等に区分する等其分類雑多にして講述上の混雑少なからず従つて理解を得を困難ならしむるが故に本篇に於て勉めて繁を避け簡を撰み主として艦種に基き単隊復隊の海洋戦術のみに付きて攻究し末尾に対要塞戦術の要領を加附せんとす蓋し説法の流儀(の)雑多なるも学術の源泉に異点ある事なく末法に拘泥して本旨を忘却するが如きは講学の目的にあらざるなり

## 一 総 説

兵理とは兵戦に於て對抗兵軍の勝敗を支配する自然の原理にして戦の大小と海陸とを問はず之に順ふて戦ふものは勝ち之に逆ふて戦ふものは敗る（ふ）、而も此大理は恒久不易にして人智の発展に伴ひ兵力兵資の素質分量等に如何なる差異の生ず（あ）るも終始一貫して消長変化せざる事尚ほ力学の原理の如し、兵理を一言にして尽せば優勝劣敗の理即ち是なり、兵術は即此大理を兵戦に応用して敵と戦ふの術にすぎず然れども其応用の方法は諸他の技術と等しく時と場合に準ひ兵力兵資等の異同に依り千種万様に變化するが故に兵術其物は其戦略と戦術とを問はず變化して究りある事なく従て所謂兵術の原則なる者も時代と共に變遷し兵理に基きて其時代の兵力兵資に相応せる原則を作為せざる可からず唯永久不變のものは一に兵理あるのみ、仮令ば古代橈走を以て兵艦を操縦せし時代には兵器も亦武装せる兵士も共に艦の前後に配備せしが故戦鬪の陣形は一に横陣を以てせざる可からざりに世の進むに従ひ推進機関は橈より帆に代り帆は又現今の暗車に變じたる結果兵装は船側に備へられ従つ

て戦術上とるべき隊形は横陣より一変して専ら縦陣となり又大砲と水雷の発達と共に衝角は殆んど今日戦闘の武器に非るが如く兵術上の原則は兵資と共に常に變化す

戦略の変遷は緩徐なるも戦術の進化は急劇なり等と唱(喝)ふるものあるも之れ何れも非なり戦略も戦術も唯技術の範圍に大小あるのみにて恰も同心円の直径に大小あるが如く其本質は何れも兵力を応用する技術即ち兵術にして差異ある事なり 同一不変の兵理に基きて千變万化するものなり、例へば無線電信の未だ世に出でざるに当り対馬海峡の警備をなさんには通信力の及ぶ範圍大ならざるが故に多数の艦艇を配備せざるべからずと雖も今日に於ては昔時の如く多数を配するに及ばざるが如きは即ち戦略の古と今と相變化したる一例なり

二、(第一節)

兵戦の三大元素

兵戦の由て成立する大元素は諸多の科学に於けるが如く時、地、力の三素なり、和漢の古兵家は之を天、地、人と唱へ泰西の兵家は Time, Place, Energy と説くと雖も皆之れ觀察の異同より生ずる異名同物の称号に外ならず抑も優勝劣敗は兵理の根本なり然れども優

劣は単に兵力のみ（計其数）の優劣に依て勝敗を決し得べきにあらずして時と地の価判を以てせざる可からず、此時、地、力とは抑も如何なるものなりやを知得せんと欲せば吾人は先づ瞑目して宇宙の真相を沈思す可し始なく終なく長久究りなきものは時なり、充滿して尽くるなきものは力なり、斯く名状するの外他に説明の言辞なきを如何んせん、此三者を併有せずして兵戦は固（もと）より凡百の事件は成立するものにあらざるなり、

例へば卑近の事実に於て幾時間幾何の場所に幾人を使役すれば幾何の成果を挙ぐると言ふが如き時など其一元素を欠くときは成算はたつべきにあらず兵戦も亦此三素の併用の調和宜しきを得て適當の時、適當の地に適當の力を用ゆれば（ふるの）能く其効を成す之を成功 work down と言ふ只単に力のみ見て時と地を察せざるが如きは未だ兵戦の真理を了解したるものにあらざるなり

今数理に基き此三元素を計量する時は時に長短あり地に広狭あり力に大小あり時の極微なるもの之（これ）を時刻といひ其度量を有するもの之を時間とい云ふ、地の極微なるもの之を地点といひ其度量を有するもの之を力量といふ、換言すれば計量的に此三素を述べんか（が）時に長短あり地に広狭あり力に大小あるなり又之等と比較的に説かん乎、時を対比にするときは現在を基準として強弱優劣等を生ず之を形象的にいはんか、時に明闇（闇明）寒暑晴陰等あり之

を時象といふ、地に水陸、陰易、高低、深淺、**潤** (**闊**) 隘等あり、  
 之を地形といふ、力に集散、動靜あり然れども計量、対比、形象等  
 己に人為的に差別を附したるものにして自然にあらず平等に大觀す  
 れば時に長短先後なり、地に広狭方位なり、力に大小消長なきもの  
 にして是れ三大元素自然の本質なりとす、兵戦は人為の現象なり故  
 に三大元素を計量対比するの必要あるが故に兵学を講究するに当り  
 屢々真理の帰一する所なきを遺憾とする事あり、例へば戦争と戦闘  
 とを区分し戦域と戦場とを区分し戦略と戦術とを類別するが如く  
 (**きも**) 計量対比の標準を定むるにも (**し**) 諸家任意の界説を作為  
 するの己むを得ざるに至る是れ本来自然に違反し分限し難きを分限  
 せんとすればなり、  
 已に前記するが如く人類は時、地、力の三素を利用して相争闘す之  
 を兵戦といふ然れども人智の發達未だ完全に**此三素**を利用する能は  
 ず空過せしむるもの多く広漠たる地も僅に地球表面の一部に限られ  
 未だ大空に飛行する能はず無量なる力も又人類其物が固有する体力  
 と機物の潜力の幾分にすぎず昔時人智未だ今日の如く發達せざりし  
 所謂野蛮時代には只一小土上に於ける短時腕闘にすぎざりしも世の  
 開明と共に戦場も次第に拡張して己に海洋に之を利用し得る世の進  
 歩に達し**人** (**又**) 力の利用も始めは (**り**) 単に腕力のみなりしが先  
 づ白兵を用ひ次で弓銃砲等を操るに至り戦闘距離を一腕の長さより

漸次に延長して砲銃の到達距離となり對抗兵力を打算するにも昔時は人頭の潜力より機物の潜力に変移せしが如く将来に於ても亦如何なる力素の現出すべきやを知らず蓋し天地に充滿せる万有の潜力は悉く人類の智能により利用せらる可きものなるが故に遠き未来に於て生れながら天の一隅を睥睨すれば雷火忽ち降り来りて数万里以外の敵軍を瞬時に塵殺するが如き事ある可しと想像すれば今日機力の応用も尚幼稚なりといはざる可からず人智は進歩して究りなし吾人は現時の陸軍を以て野蛮時代の遺物と冷笑せる閑に海軍も又水面のみに固着し飛行潜行の術を知らずと言はるゝの時節必然到来すべきは之を己往に鑑みて将来に推するに足るなり、

三大元素（は特に）力の利用の限度にして（、）以上述べたる如くなるときは兵戦は比較的、未だ（尚ほ）複雑にして時及地より生ずる外力の（か）干渉を蒙り之が為め兵力を消長せしめらるる（する）事少なしとせず即ち（からず）時に暗明、寒暑晴陰あり地に水陸、陸夷高低深淺闊隘等あり 時象地形の利害得失は兵力以外に於て兵戦の勝敗に關係する事今尚大なり然れども若し力の利用進歩するときは時象地形の利害關係は次第に減少するものにして現に吾人が見る如く比較的進歩せる海軍の兵戦には陸戦の如く地形の利害を感ずる事なし若し夫れ将来大空に戦ふに至つては時象地象なきに至るも



尚力と(は)共に兵戦の三素たる可きを論くを待たざるなり、  
 前段述べ来りたるが如く時、地、力の三素は其計量対比形象等に依  
 り幾多名称の下に兵戦の諸要素を形成すれども精細に之を分析すれ  
 ば終に本来の三大元素に帰納せられ恰も三脚台の三脚の如く其一を  
 欠けば顛倒して兵戦の成立せざるの極理に徹底すべし而して此三素  
 の調和均衡を得せしむるは兵術の要旨にして三素皆優大なれば其面  
 積も従つて大なるが如しと雖も若し力足らざれば時若くは地を以て  
 之を調和し、時利あらざれば地又は力を以て之を補足するが如くせ  
 ざる可からず例へ地域狭小にして大軍を一時に用ふる能はざれば兵  
 力を数分して順次に攻撃を続行し或は時日許さざれば全軍を大地域  
 に展開して一気に勝敗を決するが如き或は兵力足らざれば地利を占  
 めて耐久の防禦を事とするが如き皆是れ時、地、力の三素を調和し  
 て交戦の目的を達せんとするが如き皆ならず、此三素何れも兵戦に欠く  
 可からずと雖も其何れが最要なりやと問はゞ力を第一とし地、時之  
 に次ぐ之力は人為を以て之を消長変化せしむる事比較的最も容易に  
 して地と時とは順次に其難度を増加するのみならず力多大なるとき  
 は地と時との不利を排除するを得べければなり例へば力に属する兵  
 力は有形的と無形的とを問はず人為を以て比較的任意に増大するも  
 地に属する大小を開き大海を埋むるは今日未だ人為を以て至難なる  
 のみならず時に属する風を静め雪を払ひ夜を昼となすが如きに至つ

ては更に殆んど不可能なるが如し、然れども人多ければ天に勝ち得るものにして人類の力を積るときは昨の天陰今は坦々たる墜道を通じ無数の探海灯は暗夜を白昼の如くならずを得、力能く地と時との不利を排除するの例証を見るに足るなり依是觀之三大元素中力を最要とし兵戰に於ては先づ兵力の優劣に着眼し次で地の利害を觀察し終りに時の適否を考慮するを正當の順序となさざるべからず古の漢人時に地、力を天地人と稱し天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かずと説きしも亦故なきにあらず兵戰(事)に従ふ者其業務の何たるを問はず常に時、地、力の三素に考察するときは庶幾くは過失に遠ざかる事を得ん、

(附言) 以上兵戰の三大要素及其變態等に就き諸君の啓発に資する為め其要領を述べたり諸君は尚ほ目を能く兵戰の時々物々に就き實際問題に就(を置)きて此三元素の關係及其變化等を探究さるべし終に真理の徹(到)底する所に悟入するを得 他日戰陣に臨み我身辺を圍繞せる雑多の現象を冷靜に觀察し其判断を誤らざる頭腦を養成するを得べし

三、(第二節) 力の状態及用法

夫れ力は宇宙に充滿し其全量に於て増減する事なしと雖も其集散常なく或は固体と共に凝結し或は液体に入りて流動し或は氣體の中に浮遊し其密度に濃淡の差あり而して己に集結して一体を成せる者更に相集りて一団に結合せるあり或は散して分離せるものあること宛かも物質の如し即ち集中散あれば散中又集あり是れ力の状なり又其態を見るに動靜定まりなく日月、星晨の如く運動せるあり木石の如く運動せる地球の上に靜止せるあり或は又月水の如く其の上に運動せるものあり動靜あり靜中動あり是れ力の態なり此等の状態は實に千状万態にして**物（將）**に一々形容す可からず之を極觀すれば集散といひ動靜と云ひ之と是れ程度の比較にして散の密なるを集と云ひ動の微なるを靜と謂ふに過ぎず**（ざる共）**之を大觀すれば力の状態は集散の二状と動靜の二態に外ならざるなり、人類は自ら其力量を保有せず、皆自然に存在せる力を借り凡百の功果を成すのみにして針**の**大**（の）**地を穿ち風の船を行り弾丸の敵を殺傷するが如き皆天力の利用にして人体固有の動力の如きは真に少量にして之すらも正当に言へば天有に属するものなり、吾人はかくも力量を利用したるを人力と呼稱し天力を巧妙に利用するものは宛かきものにあらず而して人能が此天力を利用するに当り現在の天力を

単純に用ふるものあれども多くは機関の媒介を要す風の船を行る帆  
 を要し弾丸を発射するに砲を要するが如き是なり、此等の機関は人  
 能の発達と共に簡單より複雑に入り今や複雑枚挙す可からずと雖も  
 要するに之れ多年の工夫に成れる人能の集積に過ぎざるものにして  
 兵戦に於て兵力と謂ふは(も)即此天力を利用する人衆と之に要す  
 る機関の数量とを以て其天力を利用し得る分量を代表するものなり  
 斯く人類の力を用ふるの法則は他なし唯力の状態即ち力の集散動静  
 を理するにあり、力大なりと雖も散すれば或部に弱く小なりと雖も  
 集まれば一部に強し又力ありと雖も動かざれば何等のなす所なく動  
 けば必ず多少の功をなす是れ自然の理にして力を集合して之を動か  
 さざれば何等のなすところなしと雖他力の来つて之に撞撃するとき  
 は其現有の力量を以て抗力を逞ふする事尚岩石の水流に抗するが如  
 し又力を集合して動かせば其力の多大なると運動の迅速なるとに従  
 ひ益其衝力を大にす例へば弾丸の堅鉄を貫くが如き是なり、又力を  
 離散して動かさざれば其各部の薄弱なりと雖も能く大地域に亘りて  
 若干の支力を有する事尚数十の小柱が大家屋を支持するが如し又力  
 を離散して之を動かせば大地域に亘りて各部に多少の功をなす例は  
 霰弾の大衆を殺傷するが如き是なり、而して力の自然の状態は前述  
 せるが如く集散動静常なきを以て人為を以て集を(り)散し散を

ち力の用法にして其要旨は為さんとする目的に依じて力の集散動静  
 を調理し他力に対し我が衝力抗力を優大ならしむるにあり本来無き  
 力を出現せしむる事は固より人為の能くする所にあらず兵戦に於け  
 る兵力用法の原理も亦之に外ならざるなり、  
 人類の利用し得る力の分量に大小あり其多々益々大なるを可とする  
 事と己に前部三元素に就きて述べたるが如し而して己に或る力量を  
 保有したる後は之を最も有効に活用して功果を挙げざる可からず、  
 優大なる力量を有するも之を用ふるの法を知らざれば其成效少く又  
 与へられたる力量少くとも之を用ふる法を得れば其成效大なり、其  
 用法は即ち**既（本部）**に述ぶるが如く力の**（は）**本然は状態に従ひ  
 其集散動静を調理するにあり、故に本来の優大なる力量を保有する  
 事は大功をなすの要素なれども亦之を用ふるの法を知らざれば何等  
 の功を奏する事なく却て劣小の力量を巧妙に活用するに如かず、例  
 は茲に一兵軍あり優勢の敵と對抗するに当り我兵力を集中して敵の  
 一翼を迅撃し敵の全軍未だ我に応ずる能はざる間に己に之を破り策  
 を急転して敵の他翼を衝き此の如くして終に大敵を撃破するが如き  
 或は又均勢の敵に対し我兵力を二分し其一部隊は**地（他）**物の力を  
 借り静止して敵の攻撃を待ち敵の全軍我此一部隊を撃破せんと努むる  
 間に分離せる我が他の一部隊が迂回して敵の側面を衝き両隊合撃し  
 て敵を破るが如き皆之れ力の集散動静を調理するに外ならず又力の

本態の状態に集中散あり動中静あるが如く兵戦の現象にも亦散中集  
 もあれば又散もあり静中動もあれば又静もあるを觀察し得べし、彼  
 の戦略的には兵力を戦地（辺）に集合するも戦術的には之を戦場に  
 離散するが如き或は戦略的には一地域に静止して守勢を執るも戦術  
 的には攻勢をとりて運動せるが如き之なり然らば如何なる場合に如  
 何に集散動静すべきやは次に來るべき問題にして力集まれば形象な  
 くして真の一点に集中するとも散ずれば必ず或る地域を占め或る形  
 象をなす又静すれば其所在を換へず方向定まらざるも動けば必ず或  
 る時間を要し或る方向を有し其地域の広狭時間の長短形象方向の適  
 否等の如き皆此の問題に属し此等は敵に依り変化するものにして是  
 兵學講究の大部分を占むるものなれば茲に詳論せず茲に（本節）は  
 単に力の自然の状態は如何なるものにして人は自ら力を有せず唯だ  
 天然の力を利用するのみ而して之を用ふるの法は唯だ自然の状態を  
 理するにあり即ち到底する所は集散動静の四法に帰すると云ふに止  
 めん、

四、（第三節） 優勝劣敗の定理

夫れ苟も力を以て相争抗する宇宙間は何事も優勝劣敗の原理に支配



せられざるなし即ち優勝劣敗は力争に於ける自然の判決にして天秤が重き一方に傾斜し電力が其抵抗を強過し汽罐が汽圧に耐へ地球遠心力が太陽の求心力に拮抗するが如き卑近より高遠に至る迄万有抗争の現象は一として此真理を証明せざるはなし兵戦の判決も亦此に洩るゝ事なく劣者は到底優者の敵にあらざるなり然るに古来幾多の兵戦に於て劣者往々優者に勝つあるものは是れ優者が其優勢なる兵力を完全に使用する能はざるに困るものにして其對抗の際優者の發揮したる実力は劣者のものよりも少く事実の真相は優者優ならず劣者劣ならざりしなり換言すれば有形的に優なりしも無形的に劣なる所ありしたためにして劣者は数に於て劣なりしも術力に於て優り時と地の利用宜しきを得て無形の力を増したるに依る(の)即ち兵力を完全に使用せんとする事吾人の今講究せんとせる兵術の大目的にして其兵術の大(一)原理は此優勝劣敗の真理より発生するものなり、今茲に兵術なる声を見し時と地に関係なく真の一地点に二個の兵軍が相衝突したりとせば自然の判決に従ひ次の定理を生ず

## (イ)

第一定理 凡そ二個の兵軍一地点に於て各其兵力を集合して相戦ふときは其兵力優れるものは勝ち劣れるものは敗るむ、若し其兵力均一なるときは両軍共に全滅するに至りて息

此の根本的定理は宛かも三角形の二辺の和は一辺より大なりと云ふに等しき動かす可からざる第一原理なり、之を實際に証明せんとせば茲に或る二艦を(の)同方向に並列し静止して対戦せしむれば其戦闘力の優劣に依り其勝敗を決し戦闘力平均なれば相互(当)に全滅するを見るを得べし故に戦ふて敵に勝たんと欲せば先づ其兵力を優勢ならしめざる可からず、但し兵軍なる概括的名称の下には軍艦も戦隊も艦隊も亦大艦隊も含有せられ前(節)に述べたるが如く集といひ散といふは唯程度の比較に過ぎざれば仮令集合するとも必ず或る地域を占領して或る形状をなし真の一地点に集中すべき理あらずと雖も大観すれば之を一地点に集中するものと見做して推理上支障なきなり、此第一定理を敷衍し時に關係なく単に地点を拡張して地域とし兵軍の集合を解き之を離散静止して對抗せしむれば第一定理に基きて左の第二定理を生ず、

(ロ) 第二定理 凡そ二個の兵軍一地域に於て各其兵力を離散静止して相戦ふときは各交戦地点に於ける勝敗は第一定理による



茲に離散と云ふは分離したる兵力の結合なきを意味するものにして分離したるもの相応援し得る距離に在るは未だ多少の結合を維持し或る程度迄集合せるものなるが故に之を離散とは云ひ難し而して離散の状況に種々ありて或は二部に分れ或は三部に分れ或は又数部に分れ對抗兩軍離散の状況同一ならずとも此定理に常に適合するものにして其内に隔離して対敵を有せざる者あれば其部分は全軍の兵戦に参加せざるものにして初めより之なきものと看做して可なり、

此理を以て推すときは兵軍或る地域に離散して戦ふ場合にも優勝劣敗の真理は各地点の對抗を判決し之を綜合すれば(るは)全軍の勝敗を判決するを得べし然れども此定理に於ける兵軍は未だ静止の態を保持し時の關係を有せず故に更に時を加へ兵戦のみ之を具備して對抗せしむるも同じく優勝劣敗の原理に帰一し左の第三定理を生ず

(ハ)

第三定理 凡そ二個の兵軍一地域に於て或る時間に亘り集散運動して相戦ふときは各時刻に於ける勝敗は第一第二定理に拠る

兵軍如何に集散運動するも各時刻に於て静止せるに異らず時間は如何に長くとも極微なる時刻の集積せる者なり、是れ此第三定理が第

一及第二定理に基きて成立せる所以にして大小の兵戦其戦地の広狭  
 と戦時の長短とを問はず此三大原理を以て推度するときは到底する  
 所終に優勝劣敗の一真理に帰納せらる、  
 兵術の要は此真理に悖戻せざるが如く兵力を運用するにあり即ち如  
 何なる地点如何なる時刻にも常に敵に對し我が優勢を維持するは決  
 して敗をとる事なし、此複雑なる兵力の運用術が吾人の是より講究  
 せんとする兵術なれども其大原則は此に述ぶるが如く単に優勝劣敗  
 の天理に服従するに外ならず、於是兵戦に當りて先の(づ)彼を知  
 り己を知りて彼我兵力の優劣を計査せざる可からず、彼の兵力を知  
 れば之れに優れる兵力を以て對すれば百戦百勝せざる事なし然るに  
 彼我の兵力を知悉する事は難事中之至難なるものにて天稟の明智と  
 百練の経験を以てするも尚ほ誤算を免かれざるなり、今左に其所以  
 を附説せんとす夫れ兵力とは兵軍の人衆及機關の數量を以て其利用  
 し得る天力の分量を代表せしめたるものなる事前(節)に述べたる  
 が如し此人衆及機關個々の力量に有形無形の要素ありて其計量の複  
 雑困難なる事は前編戦闘力の要素に説きたるが如くにして単に人衆  
 及機關の數量を以て兵力を表示するも真正の力量となし得らるゝも  
 のにあらず、加之人衆個々の術力は生理及心理上の原因より其消長  
 常なきものにて臨戦前例令は之を計量し得たりとするも終始之に信  
 拠す可からざるなり、例へば茲に一艦ありて其艦員は平時の射撃に

於て平均百發四十中の術力に練達し得たりと仮定せん此艦戦陣に  
 臨み一度(死)敵の大猛撃を蒙るときは艦員の士氣忽ち挫折して周  
 章狼狽の極其術力の多分を亡失し百發四十中の術力は頓に下落して  
 百發一中にさへ及ばざるに至る事あり、此の如きに至れば其一艦の  
 兵力は諸多の力素に変化なしとするも轉瞬(転)の間に四十分の一  
 に減少したるものにして是心理に原因せる兵力の消長の一例なり、  
 或は又茲に一師団の兵衆ありて早朝一地を發し夕刻某地に達したり、  
 と仮定し其朝夕の戦闘力を計量するに人馬の頭数には増減なきも長  
 途の行軍に疲労したる後とせざる前とは實際の戦闘力に大なる差あ  
 るを見る可し是れ生理に起因せる兵力の消長の一例なり、其他斯の  
 如き兵力の消長は兵戦中常に(々々)之あるものにして真正の兵力を  
 計上知悉するに(は)困難ならしむ実(分)に彼を知るは固より己れすら  
 能はざるなり、吾人自ら省みて我は(分)幾許の見識を得幾多の能  
 力を有せりと自信するも戦闘に臨み果して之を充分に活用し得るや  
 否やを想慮するとき(は)我身一人にも信賴する能はざる事あり  
 況や他人をや、  
 彼我兵力の優劣を知る事の難き斯の如く然り而も優勝劣敗の真理に  
 悖らざらんには予め彼我の兵力を知るに力めざる可からず、是れ用  
 兵の第一要義なり、然れども其知力及ばざるときは彼我(一)兵力  
 の打算に充分の余裕を置き敵の兵力を下算せず我兵力を過算せざる

を安全なりとす此れと同時に常に我手裡にある兵衆を教練して其直  
 正の兵力を多々益々優勢ならしめ之を用ふるに当りても心理生理等  
 に原因せる力量の減退を予防すべき一切の手段を尽さざるべからず  
 是れ用兵の第二要義なり、  
 此の優勝劣敗の兵理を兵術に適用するに正奇の両法あり即ち敵に対  
 し常に我兵力を増大するを其正法とし我に對し敵の兵力を減少する  
 を其奇法とす例へば我兵力を一地点に集中して其地点に於ける我優  
 勢を保持せんとする此兵理の正用にして佯攻牽制等を以て敵兵力の  
 一部を交戦に参加せしめざるが如き其奇用なりとす、此応用法に於  
 ては或は正法のみを取り或は奇法のみを施し或は又正奇両法を併用  
 すれども其目的とする所は一つに交戦地点に於て敵に比し我兵力を  
 優勢ならしむるに在り、  
 而して敵に比し我兵力を優勢ならしむるの程度には極限あらざるも  
 のにして彼の一に對する我の二より三なるを可とし更に三より五、  
 六、七、八と多々益々大なるを上乗とす、故に其極度に達せば正法  
 に依り我兵力を無限に増大するか或は奇法に依り敵の兵力を無限に  
 減少して皆無即零にならしむるを最上乘とす斯の如く敵の兵力を皆  
 無ならしむれば兵戦は成立せざるに至り遂に所謂戦はずして敵を屈  
 するを得るに至る即ち兵術なる者は其戦略と戦術とを問はず為し得  
 る限り我兵力を敵に對し優大ならしめ可成的容易に敵を圧屈するを

期し決して力戦苦闘して得難き勝利を強めて得んとするを努めざるべきものなり蓋し古の兵家が百戦百勝善の善なるものにあらず戦はずして敵を屈する之を善の善なるものと謂ふと説きし又此真理に起源するものならん、以上兵戦上に於ける優勝劣敗の原理は単に力の優劣を基礎とし地と時との利害得失を對抗両軍に平等なるものとして成立せるものなり、然るに地と時は此の優勝劣敗の原理に基き兵力を適用するに及んで利害の干繋を生じ、兵理をして漸次に複雑ならしむ此等は尚ほ後（節）に説明する所あれば学者単に此一節のみに執着せざるを要す、

優勝劣敗の原理に基き前の定理を敷衍すれば次の十一（定理）を得、

- 1、二個の兵軍一地点若くは一地域に於て相戦ふとき（其兵力の）兵軍の集散動静を問はず各交戦地点に於ける兵力の優なるものは勝ち劣るものは敗る、
- 2、此定理は基本第三定理を約言したるに過ぎず、均勢なる二個の兵軍相対抗するとき優勢なる兵力を同時機同地位に戦はしむる形状を採る者は勝ち否らざるものは敗る、
- 3、均勢なる二個の兵軍相対抗するとき其運動速度の優に依り変位

- 10、 於て攻勢をとり劣者は全局に於て守勢を採る攻勢をとるものは  
 不均勢なる二個の兵軍各分離し相対抗するときは優者は全局に  
 れば敗れざる事を得、  
 9、 採り劣者は守勢を採る、守勢を採るものは時と地とを利用し得  
 不均勢なる二個の兵軍戦域に於て相対抗するとき優者は攻勢を  
 の利を得たるものは勝ち否らざるものは敗る、  
 8、 均勢なる二個の兵軍戦に於て同一の情勢を以て相戦ふとき時象  
 均勢なる二個の兵軍戦域に於て同一の情勢を以て相戦ふとき地形の  
 7、 利を得たるものは勝ち否らざる者は敗る、  
 均勢二個の兵軍戦域に於て同一の情勢を以て相戦ふとき地形の  
 6、 し適當の時機適當の地位に優勢なる兵力を集中し得るものは勝  
 ち否らざるものは敗る、  
 均勢なる二個の兵軍各々集散離合して相対抗するときは敵に對  
 5、 きは敵に對し適當の時機適當の地位に優勢なる兵力を集中し得  
 るものは勝ち否らざるは敗る、  
 均勢なる二個の兵軍各數個所に分離して相戦ふとき連絡の強固  
 なるものは勝ち然らざるものは敗る集散離合して相対抗すると  
 4、 を利用するものは勝ち否らざるものは敗る、  
 均勢なる二個の兵軍相対抗するとき對敵の好位置を得たる時機  
 敗る、  
 變形を速かにし對敵の好位置を得るものは勝ち否らざるものは

二、其各部の兵力を同時機に同地位に用ふる事を得れば（るは）勝ち守勢を採るものは敵の一部に対し我各部を同時機同地位に用ふる事を得れば敗れざる事を得、均勢なる二個の兵軍同一の情勢を以て相対抗するとき我機関を保存し敵の機関を亡失せしむるものは勝ち否らざるものは敗る、

2、兵軍相対抗するときは或る地域を占め必ず或る形状を取る、之を同時機同地位に戦はしめんには曲線と直線とに關せず兎に角「 $\Gamma$ 」に近き形状をとらざる可からず、

然れども「 $\Gamma$ 」に近き形状にありては其翼は薄弱なるを免かれず於是定理 2（三）を生ず、

3、即ち変位変形を速かならして（め）以て「 $\Gamma$ 」をなす所の薄弱なる翼を変じて常に対敵上好位置を占めざる可からず例ば一隊が敵に対し丁字を画き得たりとするも変位変形を速かならしめざれば敵は我が翼に丁字を画くに至るが如し、

対敵上好位置を占めんには距離を基とす可からず、必ず隊形を本とせざる可からず彼の円戦術の如きは距離を基とせるが故に彼我両軍は元より受くる所の利益均一にして偏重ある事なし、



- 4、  
 対敵上の好位置を得たれば其時機を利用せざれば何等の得る所なし、此時機は常に僅かに数分時に過ぎずして須臾に戦勢変じ此時機も亦消失す彼の日本海海戦の初め我軍がSWの針路よりNEの針路に転じ敵の二縦隊の先頭に丁字を画き得たるは対敵上の好位置を得たるものにして其時機は暫時に経過し去りたるも我軍は元と得たる好時機を十分に利用し得て敵に大打撃を加へ勝敗を早く己に此時に決せしむるに至れり、
- 5、  
 分離して戦ふは有形的の分離にして各部隊の間に若干の距離を存す、故に無形的心理上の結合を此間に存せしめ以て連絡の鞏固を維持せざる可からず、
- 7、  
 集散離合及其連絡の情況にして彼我均一なるも地形の利を占むれば(るは)戦勝の我れに帰するや明なり、海軍にては海洋に相戦ふが故に戦術上地形の特に利用す可きものあるなし、然れども兵力の運用上に関係あるを以て戦略上地形の利用は大に必用なり、日露の役我軍の勝利の一因は戦略上地形の利を占めたるにより、地形とは Plan view にして高低深淺なく(り)其之れ有る地形とは Side view 即ち地勢なり、
- 8、  
 時象の利用は陸軍にて突撃を行ふに払曉に乘じ水雷艇の夜襲に暗夜を撰ぶが如し、然れども時象は彼我共に同じ利害關係を有し一方にのみ有(同)利なるものにあらず、只之を用ふると用



ひざると(き)に依り其利を受くると受けざるとの差を生ず、又時象の利害は兵の素質に依り其關係を異にす例へば大艦は暗夜を厭へども水雷艇には之を撰み又露人は寒所に堪ふるも日人は暑さを恐れざるが如し、

二、兵力は人力と機力とを合したるものなり、機力には次の五種あり、

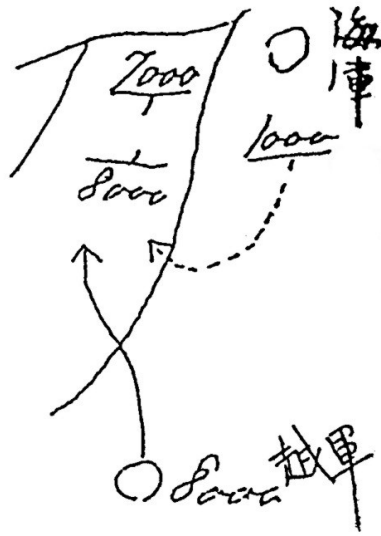
- 1、生存機関
- 2、攻撃機関
- 3、防禦機関
- 4、運輸機関
- 5、交通機関

兵軍此機関の一を欠けば乃ち弱点を生ずるを以て此等機関の亡失は則ち敗を招く所以なり、

要するに優勝劣敗の道理に依り適當の時機に適當の兵力を適當の地に集中する如く運用の妙を得たるものは必ずや勝利を収む可きものにして古今其戦例に乏しからず、

河中島の役に於ける信玄軍を二分し七千に自ら將として別に河中島の平野に一方を以て謙信の軍に向はしむ、謙信乃ち八千に將として

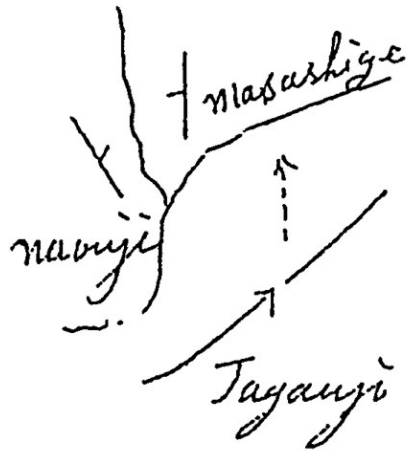
城を空ふして信玄の軍に向ひ之を苦しむ、会（々）一万の敵軍背面より迫まり腹背敵を受けて遂に敗績せり、



（注） 図中の「海軍」は「甲斐軍」の誤記と考えられます。

湊川の役正成直氏の軍と戦ひ戦勢頗る利ありしに尊氏の西宮附近に上陸して義直に当らしむ可き軍勢の一部を割き急に正成の背面に当らしめしかば遂に腹背敵を受け忠魂空しく湊川に留むるに至れり、

(注) 本項の後半において番号が不揃いですが、縦線以降についてはそれ以前の各番号の内容に追記したものであると考えられます。



第二章 戦法上の攻撃諸法

第一節 戦闘に於ける攻撃と防禦

夫れ一般の兵戦に於て攻撃とは主働的に進んで敵と戦ふを謂ひ防禦とは他動的に敵を受け止まりて戦ふを謂ふなり、然れども戦闘に於ては實際對抗両軍の行為上に於て攻撃と防禦とを門劃に區別する事難く特に戦闘己に緒戦の時期を経過して其戦の酣となるに及んでは攻防の弁別殆んど皆無なるを常とす之を海洋戦の情況に見るも彼我両軍其中間に戦闘距離を距て、相撃殺せる現象を瞥見すれば吾人に攻撃をなせるものにして防禦と認む可きものあらざるなり、吾人は敵水雷艇の襲撃を防禦するを水雷艇(に)防禦と慣稱するも己に敵の水雷艇が戦ふ距離以内に近接攻撃し来らば我激甚なる弾雨を以て之を砲撃するに方りては其間に於ける彼我の行為は共に(其二)攻撃にして唯一方は(に)水雷を以て攻撃し他方は砲弾(?)を用ふるの別あるにすぎず、抑も戦闘の本義は攻撃なり、己に我を以て戦闘が攻撃を意味するものなれば戦闘行為に防禦なしと云ふも可なり、故に兵術上に於て所謂攻撃とは唯其動作に就き次の如く區別するに過ぎず、

1、発動の際に於ける動作が主動的なるか他動的なるか  
 2、對敵の意志が積極的なるか消極的なるか、即ち発動の際に

於て先づ動いて敵を撃たんとする積極的の意志を有するもの  
 を攻撃と謂ひ又敵より先づ働き掛けられて受働の位置を  
 定め敵に撃たれざらんとする消極的の意志を有する者を防  
 禦と云ふなり換言すれば主動的にして積極的の攻撃を攻撃  
 と稱し他動的にして消極的の攻撃を防禦と稱するものなり、

斯く區別するも尚戦闘の経過中攻者必ずしも終始攻撃を続行せず防  
 者も亦時に攻撃に転ずる事あるが故に戦闘全期を通じて對抗兩軍一  
 方の働作を全然攻撃とし他方のものを丸で防禦とすべからざる事あり、  
 本来所謂防禦なるものは好んで執る可き戦闘動作にあらずして唯我  
 兵力劣少にして到底攻撃する余力なき場合に於て己むを得ず、之を  
 執るか或は攻撃働作に移るの前一時敵を制するの手段として此姿勢  
 を取る事あるも（一も）其轍頭轍尾防禦を執るものは決して戦闘  
 の戦術上の目的を達成し得るものにあらず、加之積極的の攻撃は最  
 良の防禦にして敵を防がんと欲せば先づ之を撃て我れを攻むるの余  
 力なからしむるに如かざるものにして彼の南北戦争当時の勇将「フ

アラガット―提督が「精確なる我砲火は最上の装甲なり」と云ひしも前記の攻勢防禦の真理を別語にて言ひあらはせるものなり、

斯くの如く攻撃は戦闘の本義にして防禦は好んで執る可きものにあらずと雖も同じく敵を攻撃するの手段として此攻防両勢即ち所謂攻撃と防禦とを比較するときは両者共に其利害あり次の如し、

#### 攻撃の利点

- 1、先制の利を占め我意図の如く開戦し敵の意表に出で攻撃の地点と時期を撰定し得る事、
- 2、心理上の利を占め我士気を興奮し敵の士気を挫折し得る事、

#### 防禦の利点

- 1、受制の利を占め我意図を隠匿し敵の意図を先知し地物を利用し得る事、
- 2、生理上の利を占め我逸を以て敵の労を待つを得る事、

之を要するに攻撃の利は先制と心理に存し防禦の利は攻撃の受制と

生理にあり、而して攻撃の利は防禦の害（実）にして防禦の利は（と）攻撃の害（実）たる事言ふを俟たず、然れども此攻防の利点は必しも絶対的に然るものにあらず、時と場合に依り此利点を適用する能はざるのみならず却て害に陥る事なきにしもあらず、以下聊か攻防の利害につき詳説せんとす、

- 1、先制は攻撃の利点にして彼の困碁に於ても先手を取れば常に我れに有利なるが如く機宜に従つて先づ敵を制すれば敵は自然の勢として先づ防がざる可からず己に防ぐに其力を用ふるは我を攻撃するの余力を減少するが故に我を攻撃する事能はず益々我より機宜を制する事を得可し是れ先制の利なる所以なれども先制必ずしも常に利のみにあらず時としては不利なる事なきにあらず彼の撃剣相撲等に於て熟練の対手が互に敵の虚に乗ぜんとする場合等に於て双方に寸毫の虚なくして乗ず可き機会なく我より先づ動けば却て我に虚を生じ敵に乗ぜらるゝ事あり、戦術に於ても其兵理は同一に適用さるゝものにして特に戦術の達人を敵とする場合等には唯先制の利のみ考て（を）迂闊に盲動すべからざる事あり、
- 2、我意図の如く開戦し敵の意表に出づるを得るは（れば）先制に伴ふ攻撃の利点なり凡そ何事をなすにも、主働に於て（も亦）

## 3、

然りとす、而して攻撃は(を)或る程度迄我意志の如く戦闘を  
 なし敵をして之に随動せしむるものなれば其利ある事を待た  
 ず然れども前段に述べたるが如く練達の敵は防禦の利点を利用  
 し我れ先づ動きて乱れ且つ勞するに乘じて逆撃を逞する事なき  
 にあらざれば常に斯の如き利ありと断定す可きものにあらず、  
 攻撃の地点と時期とを撰定し得る攻撃の利点も亦先制の利に伴  
 ふものにして先制するが故に地点と時期をも撰み得るなり、夫  
 れ防禦の他地を定めて敵の攻撃を待つ者は敵が如何なる時に如  
 何なる方面より攻撃し来るかを予知する事難く常に各方面の防  
 備を忽にすべからざるのみならず前に備ふるは後に寡く右に備  
 ふるは左に寡く備ふる所なれば寡からざる所なしとの格言の  
 如く我が陣列若くは陣地の各方面に充分の兵力を充実するは殆  
 んど不可能なる事尚一艦に於て制限ある装甲の防禦力を艦側の  
 各部に分配せんとせば各部共に装甲の薄からしめざる可からざ  
 ると一般なり、然るに攻者は我が好む時機に於て我優勢なる兵  
 力を以て防者の薄弱なる一点に突撃を加ふるを得又時宜に依り  
 敵を動乱して其弱点を作るが為め任意の所に虚撃を試むる事を  
 得るの利あり、然れども此攻撃地点及時期の撰定宜しきを得ざ  
 れば却て防者の術中に陥りて進退究るが如き事あれば地点と時  
 期とを撰定するの権利あるのみにて終始之に伴ふ利(害)あり



4、

と云ひ難し、  
 我軍の士氣を興奮せしめ敵軍の士氣を挫折する事も亦攻撃に属  
 する重大なる利益にして此無形の心力は常に有形の勢力を助け  
 て重大の効果を奏するものなり、夫れ對抗せる一般兵衆は將に  
 起らんとする惨劇の危険を予想し其神経は緊張して一種の感動  
 を与へ平静を失するに至る、是れ心理上然らしむる者にして人  
 類の天性なり此時に当り漸次に恐怖心を發生す、然るに其時攻  
 撃動作を取れば神経の緊張を此動作に散出して弛め敵に對する  
 恐怖の念消ふると同時に無意識に優勝の感念を起すものなり、  
 吾人が実戦に於ても屢々感ぜし如く初めて敵と對し我れは末だ  
 発砲せざるに敵弾己に四圍に水柱を揚たる際には直に不快の感  
 ずるも一度も応砲を始め我が全線の砲声を聞くに及んで忽ち愉  
 快を覚えて頭脳の圧迫を解かれたるが如く身邊にある兵衆の敵  
 を見るに前には皆掛念痛心の色を帯びしも我砲火の熾なると共  
 に漸次消滅して全艦の士氣自ら昂れる如くなるを感ず、敵の攻  
 撃を期待して防勢を執る場合に於ても士氣の挫折する事前記の  
 如くとすれば不意に敵襲を受け周章狼狽して之を防禦せんとす  
 る兵衆の心裡に於ける恐慌の度は尚愈大なる可くために彼等が  
 平素の訓練に依りて涵養されたる軍紀心及術力の如きも一時全  
 く忘失するに至る事あり、是れ実に奈翁が兵戦に於て士氣と有

形力との比は三と一なりと云ひたる所なる可し、

士氣の關係斯の如く重大なりとすれば吾人は常に進んで攻撃をとらざる可からず、然れども唯其利を見て害を忘るゝときは意外の奇険に陥る事あり假令衝天の意氣を以て攻撃の衝力を倍(増)加し得ると雖も敵の抵抗意外に猛烈(裂)にして我が死傷相踵で遂に攻撃の目的を達ざるを免れず之れ攻者の留意す可き所なり、我軍の士氣を高めんには緒戦の勝利を大切とす、日露の役二月八日の襲撃仁川の戦鴨緑江の陸戦等緒戦の勝利は我軍方(爾)後の連勝に大關係あり、故に主將たるものは緒戦に於ては是非共勝を収むるの決意あるを要す、之が為めには巧妙なる戦術を算せんよりも優勢を以て一挙に敵を圧倒するを可とす、

1、受制及生理上の利を占め敵を致し敵に至されず我が逸を以て敵の勞に乗ずる事を得るは防者の利なり、孫子曰凡そ先づ戦地に抛て敵を待つ者は佚す、後に戦地に抛つて戦に趨くものは勞す、故に善く戦者は人を致して人に致されず能く敵人をして自ら至らしむるものは之を利するなりと敵先制の利を占めて攻撃し来るも我にも亦此の如き防禦の利なきにあらず、例へば撃劍に於て反撃(うちかへし)の如く敵のうちこむ太刀を受とむる瞬時

## 2、

に撃ち返へして敵を斬り得る事あり、且つ動を攻撃し来る敵に  
 は自然に虚を生じ来るものにして恰も撃劍に於て我をうたんと  
 する敵が其の太刀をあぐれば自然に其の脚部以下に虚あるを發  
 見し得るが如く敵の此虚点に乗じて我を利する事を得戦術上に  
 於て先制に対し之を受制と云ふ、然れども己に前段攻撃の利点  
 を説明するに当り述べたるが如く防禦に伴ふ弱点少なからざる  
 のみならず、攻者は大抵優勢を以て攻撃し来るが故に練達の防  
 者にあらずれば受制の利を利用する事頗る難く鍛練の自信十分  
 ならざる戦士のなす可きにあらず。受制の利を利用し敵の攻撃  
 を受くるも之を報ずるは敵に対し我意図を隠蔽し然も敵の意図  
 を知ることを得、然れども若し絶対防禦ありては我意図を隠く  
 し敵の意図を知る事難し。  
 地形及防禦物を利用し得る事も受制に伴ふ防禦の利点なるは言  
 を待たず例へば港湾島嶼の形勝に拠り又敷設水雷防材等を設置  
 して敵の攻撃を待つときは此等固定地物の利は我兵力の弱少を  
 助けて大敵と抗戦するを得せしむ、陸戦に於ても地物が防者を  
 利するは同一なり然れども海洋戦（陸戦にては平野戦）にては  
 固より此等地物の拠る者なし、加之海岸戦に於ても地物を拠り  
 自ら防禦せんとするものは自然に其心底に潜伏せる怯儒心を誘  
 発し地物を利し敵に對する我攻撃力を増加せんとするよりは寧

ろ之を隠匿して自己の安全を凶らんとするに傾き易きを常とす  
 此の如きに至れば地物も防者を利する事なく却て其害を蒙むる  
 に至る、

逸を以て労を撃たる適例は日本海海戦なり、初め我は守勢に在りて  
 敵を待ち敵「ホンユ―」を出づるに及んで初めて攻撃に転じ逸を  
 以て彼の労を撃ち所謂受制の利を占めたるものなり、若し夫れ旅順  
 封鎖中敵駆逐隊夜に乘じ屢々出で、我艦隊を脅かすならば我艦隊は  
 警戒に忙殺せられたるや疑なし抑も逸を以て労に当るは多くは戦略  
 上の事に属すと雖も若し旅順の敵駆逐隊動ずる事あらば吾は戦術上  
 労を以て破れ逸に当らざるべからざりしなり、

既（次）に説明したる如く攻撃及防禦共に各利とする所ありて其利  
 あると同時に害の伴へるを見るを得るなり、凡そ人生の百事其何た

るやを問はず、利害は相伴ふものにして古人の云へる如く利害相半ばして十の利あれば必ず十の害あるものなり、故に利を見て害を知らざるときは得たるもの(を)忽ち失はざるべからざる事あり、然れども利害なるものは同時に相伴ふて起らず大低時を隔て地を異にして発生するものなり、例へば前節士気の興奮を攻撃の利点とせしむ此利の起るは多くは攻撃の発端にして戦闘の初期には其勢力当るべからざるものあるも防者の抵抗を打破する事能はず、多大の損害を蒙りて時を移すときは士気次第に消尽し却て其反動として大沮喪を来すが如し故に兵は用ふる点を適し適當の時機に害点を予防し以て其利果のみを収めざる可からず則ち攻撃の利を収めんとせば我士気昂りて末だ衰へず且つ敵が防禦の手段を施す能はざる間に迅速疾風の如く急速に大打撃を加へて其地点に於ける攻撃の目的を達するを要す、孫子がこの(よく)戦ふものは其勢險にして其節短かしと云ひ又兵は拙速を尚ぶ未だ巧の久しきを覩ざるなりと説きしも亦前記の利害の關係より来りし者にして害の生ぜざる間に拙劣なりとも迅速に利点を適用せざるべからざるを戒めしものゝ如し、若し夫れ応用の方法を過らざる限りは固より攻撃の防禦に優る事言を待たず加之戦闘の本旨は攻撃にして防禦の為に戦ふの理なし、攻撃にあらざれば到底敵を圧するの目的を積極的に達成する能はず、只防禦は我兵力足らずして己むを得ざる場合か或は攻撃を開始

する前一時の手段として之を利用するにあるのみ、仮令敵軍優勢なりと雖も巧妙の戦術を以て果敢なる攻勢を取るときは無形の勢力より有形兵力の不足を補し、(ひ) 赫々たる大勝を獲得せしむる事古今海陸戦例の証明する所なり、

彼の「ナイル」の海戦に於て Nelson は時己に黄昏なるに拘らず、敵を見るや否や直に攻撃動作を執りて先制の利を占め敵未だ戦備を整へざる前突進急撃し攻撃点を敵の隊列の前頭に撰み敵が首尾相救ふ能はざる間に其前半に占位せる敵の諸艦を撃破し尋で其後半に及ぼし殆んど之を全滅する事を得たり、

又 Trafalgar の戦に於ても英軍の艦数は仏西聯合軍に比して劣勢なるに拘らず同じく果敢なる攻勢をとり Nelson 及 Collingwood の(一) 両艦隊は殆んど直角に敵列の中堅に突貫し当時は不利なる戦勢にありしも旺盛なる士気を以て敵軍を呑(の) み且つ先制の利を占めて敵の中堅を突破し遂に彼の大勝を得たり、  
 リッサの(一) 海戦も亦攻撃の利を実証する戦例にして(テゲトツブ) 提督の率ふる奥国艦隊は重複翼梯陣を以て単縦陣をなせる以国艦隊の中部に突貫し是亦敵を破るを得たり当時(テゲトツブ) のとりたる突貫衝角戦術の如きは固より適良のものにあらざるに拘はらず尚よく其効を奏したるものは主として先制の利は攻撃の迅速なりしに困る者と認めざるを得ず、

## 第三(二)節 斉撃及順撃

攻撃法は又兵力の用法に依り之を斉撃及順撃に區別す。斉撃法とは我  
兵力の全部若くは大部を同時に使用して一斉に攻撃の目的を達せん  
とせるものにして其兵力の全部を用ふるときは之を総撃と称し又  
(ぬ)其兵力を数部に分ち各部隊各個の攻撃目標を撰んで斉撃する  
ときは之を分撃と云ふ。順撃法は我兵力の全部を一時に使用せず初め  
より之を数部に分ち各部隊順次に攻撃するの法にして此等の部隊循  
環交代して攻撃を続行するときは特に之を循環攻撃と称す、兵学上  
に於て斯く明昼に斉撃と順撃とを區別すと雖も實戦に於ては必ずし  
も此区劃を存せずして往々両者相混合するもの少なからず、例へば  
攻者が其掌握せる兵力を三部に分ち其の第一部隊には正攻をなさし  
め、第二部隊には之と同時に伴攻を以て敵を牽制せしめ、第三隊は予  
備隊として戦鬪の初期には之を使用せず戦機の發展を待つて奇襲を  
行はしむるが如きは斉撃ともいふべく又順撃とも謂ふ可きものな  
り、本来予備兵力を用ふるは順撃法の主意に出でたるものなれども  
前記の如く当初の攻撃は兵力の大部を使用するときは寧ろ斉撃法に  
近似す其他分撃法を執る場合等にも各部隊が同時に其攻撃目標に対

して攻撃動作を開始するときは固より斉撃法に属すと雖も場合に依り必しも同時に発動せず時を異にして攻撃するときには唯攻撃目標を分てるのみにて寧ろ順撃法と云ふを至当なりとす要するに斉撃と順撃は兵力と戦時の関係とに基き同時一斉に攻撃するか異時個々に攻撃するに依り兵術の講究上之を大別したるに過ぎず故に実戦に應用する場合には必しも此区分に拘泥するの要なし、斉撃法と順撃法は攻者が掌握せる兵力の精粗多寡其戦地の広狭難易及戦時の長短適否等に考へ時と場合に依じて其何れを撰む可きかを決定す可きものに於て両法共に利害得失あり(より)即ち左に各両法の利害を列記す、

#### 斉撃法の利点

- 1、攻撃力を集中し其衝力を優大ならしむ、
- 2、攻撃時間を短縮し少時間に攻撃目的を達せしむ、
- 3、各戦術単位協同動作の利便を大にす、
- 4、各戦術単位の競争心を喚起し全軍の**士気**(指揮)を興奮す、

#### 順撃法の利点

- 1、連続新鋭の攻撃力を攻撃点に注入し敵をして疲労困憊せし



- 2、 攻撃力を一時に消耗せず予備兵力を保蓄し戦機の発展を利  
用するを得、
- 3、 兵力を大地域に分散せず指揮統率を容易ならしむ、
- 4、 各戦術単位の戦鬪力を極度に發揮せしむ、
- 5、 運動軽捷なる事、

前記両法の利害は固より絶対的のものに非ずして単に比較的のものなり、而して両法の利害相反し順撃法の利は斉撃の害、斉撃の利は順撃の害たる事言ふを待たず、左に聊か其利害を論述せんとす、夫れ五指の交々弾くは一拳に如かず攻撃力を集中して其衝力を優大ならしむるは兵力の(を)分離して個々に之を用ふるより(に)優れるは理の当然たる可き所なりと雖も敵に比して我が兵力優大なるか或は戦地狭小にして大兵力を運用するに(も)不便なるときは一時に之を動かして斉撃法を取る能はず却て順撃法に依り敵の一点に連続新鋭の攻撃力を注入し之を撃破するを利とする事あり、例之は(へば)数戦隊一砲砦を攻撃し或は数艇隊の一戦隊を襲撃せんとする場合等に当り斉撃位を執るときは攻撃位地を占むるに(可きを)地域狭小なるを以て却て攻撃部隊混乱するの虞多く(は)寧ろ順撃法により交々攻撃するを可とする事あり、又斉撃法にては一時に全

兵力を用ふるが故に其攻撃点の撰定を過り或は敵の兵力を下算する等の原因より其攻撃功を奏せざるときは最早用ふ可き予備兵力なく却て順撃法にて予備兵力を保蓄し戦機の発展に乗じて之を利用するの優れる事あり、故に古来各将が兵を用ふる斉撃法と順撃法（と）を折衷し三分の二以上の兵力を以て最初の斉撃に従事せしむるもの多し、

然るに攻撃に於て各戦術単位間の協同動作は攻撃目的を達するに最も緊要なるものにて例ば一隊正攻をとり敵が之に對して全力を傾注するの際他隊が側面より横撃するか或は敵をして各方面の攻撃に力を分配して全面の兵力を薄弱ならしめ我攻撃に耐へざらしむるが如きは皆協同動作の効用にして此大利益は（を主）として斉撃に依り得らるゝものなり。順撃に於ても協同動作為し得られざるにあらざるも之を斉撃に比すれば本来同時に動作せるものにあらざれば其機会を得る事少なし、此斉撃の利点と対称（補）す可き順撃の利点は比較的兵力を分散せず、其指揮統率の容易なるにあり斉撃法にては各部隊同時に攻撃動作を執らしめんとするを以て自然の結果として大地域に兵力を展開せざる可からず、之が為戦線延長して一指揮官の指揮の下に全軍を操縦する能はず指揮官より遠隔せる部隊は戦勢の変化するに際し各独断専行を以て協同動作するの外なし、  
 其他斉撃（襲）法に於ては各戦術単位が協同連繫して一斉に従事す

るが故に孫子の所謂勇者独り近(征)くを得ず怯者独り退くを得ざらしむるも用兵の原則に適合し各単位をして比較的均一の戦闘力を発揮せしむる事を得れども若し順撃法を以て各戦隊順次に個々の運動を執らしむるときは勇敢ならざる戦隊は或は適當の戦闘距離に入らず攻撃の効果を挙げずして帰る等の事なしとせず、然れども他方より觀察するときには順撃法にも利点なきにあらず、即ち各戦術單位をして比較的極度に戦闘力を發揮せしむる事はなり、斉撃法には大部隊を長戦隊に展開するを以て狭正面の攻撃目標等に対しては自然戦闘距離を大にするの必要を生じ従つて各部隊は極度に戦闘力を發揮する能はざる傾向あれども順撃法によれば各部隊個々に適當なる戦闘距離に近接し自由に運動して有効なる攻撃を続行する事を得るなり、故に此点のみに就て斉撃順撃を混用する戦法あり例へば前記四個戦隊を率ひ敵を攻撃するに当り主将自ら嚮導して先づ自ら率ふる第一戦隊を適當の戦闘距離に迫つて有効なる攻撃を開始し第二、第三、第四戦隊逐次に其位地に來りて攻撃を続行せしむるが如きは斉撃順撃折衷の戦法にして両者の利点を失はざるものなり、士気を興奮する事は順撃法よりも寧ろ斉撃法を多しとす、是斉撃法にては各戦術單位が視界のうちにあ(よ)りて同一の目的に対し連繫(撃)動作するが故に人情の自然として各部隊間に相劣らざらんとする競争心を惹起するのみならず、全軍一時の活動に依り兵威を

振張し優勝の観念を生ずるに至るを以てなり、順撃法にても或る程  
 度迄は部隊の競争心を喚起せざるにあらざるも到底斉撃の如く士氣  
 を興奮するに至らざるを常とす（トラファルガー（ル））の海戦は  
 斉撃に依り士氣を旺盛ならしめたる顕著なる適例にして（ネルソン）  
 及び（コリンクウード）の率ふる両部隊は何れも其旗艦を先頭とし  
 て一斉に敵列に突貫せしが各部隊相後れざらんとして互に先を争ひ  
 （コリンクウード）の旗艦（ロヤルソベレーン）号が先づ敵に触れ  
 て猛烈なる砲火を開始するや、全軍士氣一層興奮して之を望見せし  
 （ネルソン）其人すらも連りに之を嘆賞し自励する所ありしは此海  
 戦史の一光彩として後世に伝はり居れり、然れども斉撃に依り戦闘  
 の初期に興奮せしめたる士氣は仮令勝戦と云へども大低終期迄永続  
 するものにあらずして我損害及疲労漸く増加し決戦期己に経過した  
 る後は全軍戦に倦んで又果敢なる進撃戦を続行するの氣力なきに至  
 り従つて十分の戦果を収むる能はざる事あり斯の如き場合には順撃  
 の主意に基ける予備隊を使用し新鋭の士氣を以て敵の困憊に乘じ戦  
 果を収獲せしむるに如かず之を要するに斉撃順撃各利害得失ありて  
 大体に於て其可否を定め難く時と場合に応じ其孰れが有利なるやを  
 考察して之を適用するにあるのみ、  
 艦隊は恰も陸軍に於ける密集部隊に等しく大なる衝力を要するとき  
 は集結したる大兵団を用ひて斉撃をなすも独立せる小兵団は其運動

輕捷なり是亦順撃に於ける一利なり、前記諸種の利害を綜合して此等の二法を適用す可き場合を区分すれば次の如し、

齊撃法をとる場合

- 1、我全力を運用するに足る可き地域あるとき、
- 2、敵の兵力比較的多大なるとき、
- 3、攻撃時間に制限あるとき、
- 4、我各戦術単位の練度に充分の信用なきとき、

順撃法を執る場合

- 1、我全兵力を運用するに充分の地域なきとき、
- 2、敵に比し我兵力二倍以上なるとき、
- 3、攻撃時間に制限なきとき、
- 4、各戦術単位の練度に依頼し得るとき、

上記の外多くの場合に於て両法を混用するを有利とする事已に前に摘記せるが如し、  
古来艦隊海洋戦の戦例を見るに對抗両軍兵力の差少き場合には大抵

齊撃法をとらざる事なしと雖も現時の海洋戦には陸戦に於けるが如く多少の予備兵力を蓄ふる事有利なる可し、抑も陸軍に於ける予備隊は不時の**変(度)**に應ずる為と我兵力を適当に維持する為と決勝点を発見し得ば予備隊新鋭なる動力を以て決戦をなさんが為に備ふるものにして畢竟陸軍に於ては敵の状況を透明する能はず従て其弱点は何れに存するや敵我に奇襲を加ふる事なきか等容易に知り難きに依る**(り)**、海洋戦に於ては彼我両軍概ね視界内にありて初めより敵の状況詳かなれば我全軍を以て敵の弱点に注ぎ別に予備兵力を有するに及ばざるが如し、然れども現時海軍兵力は著しく増加し戦鬪部隊は益大ならんとせるも同一目的に向つては同時に二隊以上を用ふる能はざれば予備隊と称するは語弊あらん**が(か)**なれども大部隊の一部は實際戦鬪に与らざるものを生ずべく此等を予備隊として適宜戦場に行働せしめ時機を得ば直に之に乗じて敵を攻撃し、殊に敵敗走せるときは已に力戦せし部隊は疲労の極戦に倦み之を追及する事なく今迄得たる勝利に甘ずるの傾きあるものなれば此予備隊新鋭の意気を以て追撃せば得る所の戦果は多大なる可し、彼の**(トラファルガル)**の役の如き英軍は実に勇敢に戦ひしと雖も齊撃の結果全軍一様に疲労し残敵を処分す可き新鋭の別隊なく為に戦果を一層大ならしむる事能はざりしは即ち此適例なり且つ又兵器の進歩に伴ひ近時の戦鬪の勝敗は昔日よりも速に**決着**

(結著) する如くなるも事實は之に反し戦闘距離増大せると戦闘に参与する兵力多大なるの故を以て容易に最終の戦果を収むる事能はざる可ければ斯る場合に予備隊の効力は偉大なるを察するに足るなり、

又大兵力を以て斉撃法を行ふ場合には攻撃目標を分てる所謂分撃法を取るを可とす、特に多数の駆逐隊水雷艇隊を以て夜中敵艦隊を襲撃する場合等には殆んど分撃法にあらざれば却つて友隊相混乱して衝突等の危害あるを免かれず、彼の日本海海戦の如きは分撃法の一なり、

若し攻撃目標一若くは二なるときは斉撃を避け順撃法により交々襲撃するを利ありとす、

海岸戦(線) 即ち敵の碇泊艦隊を攻撃するか或は要塞と協力せる敵を攻撃する等の場合には地域に制せられ適當の戦闘距離以内に於て大兵力を運用する事難ければなり、(地域狭小ならざるも布設水雷等の為に我行動区域を制せられ大部隊の運動には適せざる可きなり)(ナイル)の海戦は海岸戦(線)にして(ネルソン)は時間に制せられ急劇なる斉撃法を執りしがため当時戦場附近の海図粗略にして最も操船に熟練したる英軍の各艦長も大に運用の困難を感じ

(友艦の) 坐礁するものあるに至れり、  
順撃法の一種にして比較的有利なる戦法は循環攻撃法なり此法に依



るときは攻撃部隊循環交代するが故に各部隊十分に其戦闘力を發揮し攻撃を終りたる部隊は暫く休憩して銳気を養ひ且つ戦闘の被害等を復旧(回)し得るの利あるのみならず敵に対する攻撃を間断なからしめ遂に我が連続の攻撃に耐へざらしむるに至る、我戦国時代の陸戦々法中敵の堅陣を被るものとして世に云へる車懸り(掛)との攻撃法の如きは此の循環攻撃の原則を応用せるものゝ如し艦隊の海岸要塞戦等に於て一砲若より順次に撃破せんとせるが如き場合には此法を用ふるを最も有利なりとす、

#### 第四(三)節 戦闘距離に基ける攻撃法の種別

遠戦、近戦、接戦。

攻撃は又其戦闘距離の遠近に依り遠戦近戦及び接戦の名称を以て種別せらる、若し之に適當の名称を与ふれば遠撃近撃と謂ふを可とす、此三種の攻撃法は兵器の素質及び其の進歩の程度に準じ常に一定の標準を立つる能はず、陸戦に於ては銃火の効力に準じて遠戦と近戦とを区別し白兵の効力を見るに及んで之を接戦と称す海戦に於ても兵器の進歩せざりし Nelson 時代には戦闘距離約三百米突の内外を



以て近戦と遠戦とを區別し舷々相摩するに至り之を接戦と称せり、爾来砲煩の効力著しく發達し且つ魚雷の出現するに至りたる今日に於ては蓋し左の如く種別するを時勢に適合するものとす、

- 1、遠戦 戦闘距離約五千米突以上のもの、
- 2、近戦 戦闘距離約五千米突以内のもの、
- 3、接戦 乙種水雷の有効距離約一千米突以下のもの、

以上は現時の標準にして武器の進歩は廃止する所なきが故に今日の遠戦も亦将来の近戦となるべきは理勢のまさに然らざるを得ざる所なり、

遠戦、遠戦は武器の効力を減少する事大なるのみならず戦術上の奇法の攻撃を施すに便ならず故に決戦の攻撃法として之を用ふるは適せず、特に短時間に勝敗を決せんとする場合に於て然りとす、蓋し遠戦の利とする所は、

- 1、戦勢の変化少き為め敵の奇襲等を受くる虞少なし、
- 2、武器の効力少きため有利の戦勢を作成するに危険少なし、
- 3、我優大なる兵力を以て奇襲を行ふも能く戦闘力を均一に發揮し

得、

4、戦勢を作るに当り大角度の変針をなすもさしたる害なし

不利とする所は

- 1、射撃効少く勝敗に時間を要し弾薬を浪費す、
- 2、遠戦に於て惨害を永く目撃するときは士気阻喪す、
- 3、故に進で一と思ひに決戦するに如かず、
- 4、奇撃(襲)を適当に応用し難し、

故に持久を目的とせる対持戦或は決戦をなすの準備或は又敵状偵察を目的とせる偵察戦等には主として遠戦に依るを可とす、加之多大の兵力を以て同時に斉撃を行はんとする場合等には其決戦たると否とを問はず全軍の戦闘力を均一に發揮せしむる為め己を得ず遠戦に依らざる可からざる事あり、然れども一指揮官もし遠戦に依り敵と勝敗を決せんとせば弾薬の浪費と戦時の延長は予め覚悟せざる可からざるのみならず、自家得意の戦法も之を施すの機会なく畢竟遠戦は(遂に)其勝敗を決するの所以にあらざるを發見す可し、

近戦、近戦は射撃の効力大なるを以て有利なる戦勢の下に之を行

ふとき短時間に敵に大打撃を与ふる事を得るなり、故に決戦にありては主として近戦に抛らざる可からず、然れども戦鬪は初期より戦勢の如何を省みず、猛進して近戦を行ふ事頗る難きを以て大抵遠戦に依りて有利の戦勢を形成し然る後近戦に移るを順当とす、不利なる戦勢の下に近戦するは有利なる戦勢を以て遠撃するに如かざる事を待たず特に大部隊を率ひて近戦せんとするときは往々其隊の一部のみ近戦距離に入りて力戦するも其過半は却て適當なる戦鬪距離に至らずして友軍の苦戦を傍觀せざる可からざる事あり、斯くの如き場合には却て遠戦して全軍の戦鬪力を均一に發揮せしむるを利ありとす、要は唯戦勢の如何に注意するに在り、若しそれ戦勢我れに有利なれば優勢の敵と対し対持戦又は退却戦等を行ふ場合に於ても可成的近戦するを可とす、是れ却て敵をして其全力を我に集中せしめざる最上の方便なればなり、之れに反し劣勢寡少の敵を撃滅せんとするに当りては濫りに之れに對し近戦せんよりも寧ろ遠戦に依り我全力を均一に發揮せしむるを安全とする事多し(にあり)、

接戦、接戦は魚雷を主兵とせる駆逐(艦)隊水雷艇隊等には之に抛らざるべからずと雖も砲煩を主兵とせる艦隊の攻撃法に適せず、是れ戦術上好んで魚雷の有効距離内に入るの必要なく砲煩の効(動)力も射撃目標の移動射距離の変化、急遽なるため却て近戦よりは減

少するのみならず、戦闘は彼我個艦の對抗に變じ隊形を編制して全隊の協同動作を主とする戦術の本旨に悖戻するを以てなり、蓋し戦闘接戦に入れれば最早艦隊戦法を施す可き余地を存せず所謂個兵の格闘と化し去り易く遂に乱戦に混闘又收拾す可からざるに至る可し故に接戦は決して艦隊の行ふべき攻撃法にあらずして唯戦勢己むを得ざるに至りて之を行ふ事あるのみ

往時 Nelson は一種の接戦々法を慣用し Nile に於ても Trafalgar に於ても之に依りて大勝を獲たり Nile 海戦前 Nelson 部下艦長に訓令して日く唯進んで敵に接近し舷々相摩して戦へば我意を得たるものなりと是れ実に（ネルソン）の戦法の骨子にして当時速力遅緩なる帆船に弾着四百米突以上に及ばざる砲煩を装載し殆んど停止して戦ふ場合には此の如きにあらざれば以て勝敗を決する能はざりし事、尚ほ現時は海戦に於て近戦距離に入らざれば決戦する事能はざると一般なり、Nelson 決戦主義は吾人も亦今日之に傲ふを要すと雖も其形式は現時の艦船を以て到底之を施し得るものにあらざるなり、

之を要するに遠戦、近戦及接戦の種別は当時の兵器の効力に基き戦闘距離に準じて之を差別したるにすぎざるものにして其中庸を得たる近戦距離は即ち決戦距離にして換言すれば決戦に適當なる戦闘距

離を近戦に撰み其前後を接戦と遠戦とに種別するを至当とす、而して現時の決戦距離は艦船の攻撃力及運動力即ち戦闘力に稽へ一千乃至五千米突の間にある可し、此以外に於ては完全の敵の装甲を貫破する砲煩なり命中の精度も著しく減少し以て勝敗を決するに至らず、又其以内に於ても亦却て射撃の効力を減却し且つ六隻以上の艦隊を以て機宜の戦法を施すの余地を存せざるなり、

### 第三 (四) 節 正奇の方術的攻撃法、

兵術の大小を問はず攻撃法に正法、奇法の別あり、力争の如何なる種類を問はず正法奇法を巧みに用ふるにあらざれば得る所の効果少なし、彼の角力に於ても力攻すれば正なり、斯く力攻(行)する間に所謂奇手を以て倒すは奇なり、人の相議論するや正々堂々論理を以て相争ふは正なり、人身攻撃を加へ其大を怒らしめ次で能く敵を制するは奇なり、乃ち知る速に敵を制し大なる戦果を挙げしめんと欲せば正法を以て相争ふ間に奇法を以て之を压倒せざる可からざる事を、正法奇法は之を方術上に於けるものと心術上に於けるものと、の二者に分つを便とす、本章論ずる所は専ら方術上の正法なり、敵の弱点に乘じ寡を以て衆をうつは方術上の奇法なり、(敵) 白昼吾

が兵力を現はして戦をなすの威勢を示すは心術上の正法なり、夜に  
 乗じ敵の虚を撃つは心術上の奇法なり、優勢ならば正法をとる可き  
 も劣勢ならば己むを得ざる場合の外奇法を用ひざるべからず、抑も  
 正法は力争に陥るが故に殺人減法を致し戦果従つて少なし故に優者  
 と雖も奇法を用ふべきなり、要するに戦術の妙は奇法を用ひて戦果  
 を大ならしむるにあり、孫子曰く凡そ戦は正を以て合（令）し奇を  
 以て勝つ故に善く奇を出すものは究りなき事天地の如しと、夫れ奇  
 法にあらざれば戦果を収むる少しと雖も敵に寸毫の虚なく正々堂々  
 相對峙するときは奇も得て施すに所なき事あり、故に戦術の大法は  
 （体）正なりと言はざる可からず、仮令ば角力の如きも十分の力  
 を備へ先づ力を以てせず徒らに手のみにて勝たんとするは大関のな  
 す事にあらずして万一の勝利を堵する者に等し一国の安危に堵する  
 戦争に於て之を双肩に荷ふもの単に奇法を算すべきにあらず必ず先  
 づ力を以て相合し虚を生じたりと初めて奇法を用ふべきなり、彼  
 の乙字戦法の如きは我に実力あらざれば之を用ふる事能はざる事明  
 かなるところにして一隊は力を以て正々堂々相對峙し他隊は敵の弱  
 点なる翼端を攻撃するものにして正奇併用の典例なり、前述の如く  
 正法は殺人減法に終るが故に奇法を以て効を収めざる可からずと雖  
 も正法を用ふる外他に手段なきことあり此場合に於ては計謀を以て  
 敵を虚にし以て我を優に転ぜしめ之を以て敵の虚に加へざるべから

ず、是れ即ち虚実の術生ずる所以にして事心術に関するが故に応用  
 戦術に述ぶる所あるべし、  
 奇法の利かくの如しと雖も恰も角力道に四十八手の表裏あるが如く  
 奇道に裏の裏ありて孫子も奇正の変究むに勝すべけんや、奇正相正  
 し循環の端なきが如し執れが能く之を究めんやといへり、正奇の方  
 術的攻撃法は分つて三種とす、正撃横撃又撃是なり、正撃は正面攻  
 撃の謂なり、陸軍にては正面即ち行進方向なれども海戦に於ては艦  
 船行進方面にあらずして攻撃用武器の併列位置につきて云ふなり、  
 正撃は直に力争するが故に殺人減法に終り勝つを得るも其戦果少な  
 しされば優者若くは均勢なる場合に限り劣者のとるべき攻撃法にあ  
 らず先づ彼我の比二と三の割合をなせば安全なりとせんか、正撃は  
 力攻にして一般には効果少き事前述の如しと雖も用ふべき時機に之  
 を用ふるときは効果頗る大なる事あり即ち退却せんとするが如き敵  
 に対し正を以て圧するときは敵は其勢に怖れて意気沮喪する事ある  
 が如き是なり、  
 横撃は一翼或は側面を攻撃する所の側面攻撃にして所謂丁字戦法是  
 なり、海戦に於ては彼我共に運動力迅速なるが故に好位置を占むる  
 事難きのみならず一旦之を得るも永續すべき事容易にあらず実験に  
 よるに好位置を保つ事十分時ならんには上の上なる可し、然れども  
 斯かる短時間ながら此時間こそ勝敗を決す可き好時機なるが故に此



機を逸せず、全力を傾注せざるべからず、彼の日本海海戦に於て東郷將軍が其報告に勝敗己に此間に決せりとなせる時機は即ち丁字を画きたる時にして露軍の損害が多なりしなり、一旦丁字を画きたらんには可成永く之を持續する必要にして之をなすには一斉回頭と変速運動の二法あれども両者各々利害あるのみならず、何れにせよ極度の域に達するは難しとする所なれば熟練せる方法によるを得策とす、

又撃は正奇即正撃横撃の併用法にして所謂乙字戦法之なり此攻撃法に於ては正奇の両隊間に有形無形の連絡即ち協同動作のよく行はるゝにあらざれば其効果大なる能はず蓋し正撃に当るものは損害大なる事勿論なれども能く之を忍んで他隊をして横撃を加ふるに便ならしむべきなり、若し夫れ両者の連撃（撃）行はれず、正撃の苦戦に当るもの能く之に耐る能はずして漫りに避くるの挙に出でば横撃に當る隊は十分に敵に加ふる事能はざるに至らんされば又撃に於ては常に奇撃隊を基準とし其行動に従ひ以て協同動作を完からしむべきなり、日本海海戦に於ける戦策に於て第一戦隊を基準とすといへるは誤なり、然れども海戦に於ては運動力大なるが故に陸軍に比すれば協同動作困難にして従て又撃の実施は容易ならず、

一旦又撃せらるるときは之を脱する事困難なるのみならず、之を脱するに時間を要し其間蒙る所の損害は多大なるが故に勉めて斯る悲



境に陥らざるを要す古来此攻撃法は卅字戦法と云へり、以上の三攻  
 撃法は正奇の応用の最も正しきものなり、其他正奇の応用の変則と  
 も見るべきもの三あり、以下少しく此に説及せん  
 挟撃 挟撃は一見又撃の如しと雖も、正と正奇と奇を以て敵を挟む  
 ものにして又撃の如く正と奇との併用にあらず、此攻法に之を施し  
 得たる場合は我に有利なる事勿論にして敵は主砲を同時に両舷に用  
 ふる能はざるのみならず、両舷に敵を受くるが故に弾薬供給困難な  
 る可く殊に奇と奇に依り挟撃せられたる場合は最も苦痛を与へ得べ  
 きなり、然れども之を行ふ時機容易に至らず且つ我は敵の為に分離  
 せられ協同動作を採る事困難なるが故に挟撃の方法宜しきを得ざる  
 ときは却て個々に撃破せらるゝ事なしとせず、故に此攻法は偶然之  
 を行ふの時機来らば之に乗ずべき事は勿論なれども初めより好んで  
 採る可き方策にあらざるなり、彼の之の海戦の如きは会々碇泊  
 せる敵艦に遭遇し偶然之れを行ふの好機会を捉へ得たるものにして  
 海洋戦には決して期待し得べき戦法にあらず、

↑  
↑↑  
○  
↑

圍撃 是れ包圍攻撃にして正奇併用の一戦法とし見る可く或は又撃  
 挟撃の併用とも見るを得べし、圍撃は陸戦にて難しとする所にして  
 況して運動力大なる海戦に於ては容易に之を行ひ得べきものにあ  
 らず、たとひ之を行ひ得べき時機ありとするも我は敵よりもはるかに  
 優速優勢にして少くも勢力四倍以上ならざるべからず、孫子も大な  
 れば圍むと云ひ其漫りに用ふ可きものにあらざるを訓へたるは至言  
 なりといふべし、仮令優勢なるも包圍軍は勢力を分散するが故に連  
 絡を保つて容易ならざるのみならず被(彼)圍軍にして決死の覚悟  
 あらば所謂窮鼠猫を噛むの譬へ(と)違はず敵若し圍を突破せば  
 我が蒙る所の損害は多大なる可し、故に包圍軍には一方に血路を存  
 し置き敵をして生ん事を考へしめ以て決死の勇を生ぜしめざるを要  
 す、右により図の如き場合に於ける戦法は乙丙は敵を攻撃する事な  
 く甲のみ之が攻撃に当り敵をして一方の血路たる河を渉るの挙に出  
 でしめ、中途急に攻撃するを良策なりとせるもの即ち是なり、



旋撃 即ち旋廻攻撃は敵静止せるか或は劣速なるか若くは陣形混乱して一地に諮阻竣巡せるが如き場合に用ふ可しと雖も、概して運動せる敵に此攻法を加ふる事甚だかたしとす、敵の陣形の如何により或は正となり、或は奇となる可しと雖も、彼我速度に差少きときは多くは力争に陥り易く寧ろ此法をとらざるを可とす、彼の円戦術の如きは敵の先頭を旋撃するを目的とせりと雖も敵も亦運動せるが故に彼我等しき戦勢を持して相力争するに終るべし、之を要するに凡そ敵を攻撃するには戦略上兵力の用法先づ定まり依て以て斉撃を用ふるか順撃による可きかを決定す、於是乎、指揮者は与へられたる兵力を如何にして有利に利用すべきかを考慮し戦勢を(が)有利ならしめしが為め正奇両者を如何に用ふ可きかを決定し更に進んで戦勢如何と兵力の優劣に鑑み遠戦を撰ぶか或は近戦を採るべきかを決定せざるべからず、  
 適當の時機に適當の地位に適當の兵力を集合する事は兵家の秘訣(決)なり、即ち戦勢の鑑察と戦機の撰定を肝要とす、然して之をなすの途只戦場を多く蹈むの外なし、然れども戦争は国家安危にかゝるところ之を濫りになすべきにあらず、故に吾人は戦略上の事は図上演習戦術上の事は兵棋演習若くは実地の演習に於て之を修得せざるべからず、

指揮者に戒むべき所は其乗艦を眼中に措く事なく全隊を以て己れの念となさざるべからざるにあり、戦勢をして常に有利ならしめんと欲せば敵の方向及距離を考へ且つ彼我が位置針路を記憶せん事を要す、彼の蔚山沖海戦に於て数合の後我軍南下し過ぎしたため敵に北逸機を与へたるが如きは抑も彼我の位置と目的とを忘却したる所以にあらざるなきか、黄海海戦に於ても敵旗艦の破損回頭後は我艦隊は北上し過ぎたために二三の巡洋艦に南下の機を与へたるも亦其一例として見るを得べし、

(第三章) 戦法

戦争(即戦略)戦闘(即戦術)の目的は敵を屈するにあり其手段は敵要地の破壊、交通の絶断等種々あるべしと雖も敵を屈するに最も捷路なりとする所は敵の撃滅にあり、換言すれば戦略戦術の目的は帰する所は敵の撃滅に在りて存す、撃滅が**首(主)**眼の目的なりとすれば戦略巧妙に行はれて兵力の集中能く行はるゝも戦術巧ならざれば之を果たす能はず、反之戦略少く**(々)**拙劣なるも戦術巧妙ならんには兵戦の目的たる撃滅必しも期しがたきにあらず、是れもとより戦略と戦術とを決戦の上にて比較したる極端論に過ぎずして

敢て戦略の拙なるも可なりと云ふにあらず、蓋し戦略にして拙ならんには戦術巧妙なるも其戦争に危険なる戦たるのみならず敵の術力人は人為を以て測りしるべからずして敵を下算するの弊に陥るべきが故に兵家は常に戦略の研究を怠る可からずと雖も単に決戦のみについて云へば戦術の巧妙は戦略の不備を償ふに足るべきを信ず、戦略の拙は戦術を以て之を補はざるべからずとせば戦術の研究は最も緊要なるものゝ一なる可し、

(第一節 決戦に於ける戦法)

戦術研究上兵家の區別一ならず兵器を以てする者あり地理に基くものありと雖も隻数に基く所の艦隊戦法駆逐隊戦法に區別して之を編せんとなす、艦隊戦法は戦術単位即ち戦隊の戦法或は戦略単位即ち艦隊(大艦隊)の戦法に關し駆逐隊戦法は駆逐隊水雷艇隊の戦法に關する者にして今日適當の名称を得ざりしが故に暫く戦法の名の下に戦隊艦隊も含ましめたり、

以下説く所は決戦に於ける戦法とす、

Aの艦隊戦法は次の如く区分す、

1. (1) 単列艦隊戦法

(イ) 単列艦隊対単列艦隊戦法

(ロ) 単列艦隊対複列艦隊戦法

2. (2) 複列艦隊戦法

(イ) 複列艦隊対単列艦隊戦法

(ロ) 複列艦隊対複列艦隊戦法

(1) 単列艦隊戦法

(イ) 単列 (艦隊) 対単列 (艦隊) 戦法

基本隊形は単縦陣なる可きが故に彼我共に決戦をなす場合には同行  
 又は (する) 反行の平行戦となり、而して反行戦 (時) は巴形とな  
 るを普通とす、此の反行戦の場合に於て速力の優劣は勝敗の数に殆  
 んど関係なしと云ふも可なり、彼我の対勢は常に同一なればなり、  
 同行戦に於ても劣速艦隊は内圏を採る限りは速力は亦勝敗の数に関  
 係なし、唯複列艦隊に在りては速力大ならざれば協同働作完からず  
 且又迫 (「追」の誤字と考えます) 撃戦避戦の場合には速力甚だ必  
 要なるが故に造船上速力を等閑に附す事能はざるは素より其所なれ  
 ども彼我の単列艦隊が互に決戦をなす場合のみに就て論ずれば速力

は左程重大の關係を有するものにあらず、平行戦にありては勝敗の數は一に砲術の優劣に關し且つ両者力戦苦闘に陥り損害互に大にして勝者の得る所の戦果も甚だ少なかる可く、而して勝者と雖も其受くる所の損害は大に次回の戦闘に關係を及ぼすのみならず、両者の疲弊損害は時に第三者に漁夫の利を占めしむる事なしとせず、故に単列対単列の戦闘に於ては兎角乱れ易き**事**平行戦を避くる事に注意せざる可からず、

然らば如何なる戦法を用ゐしか日く各交战地に於ける兵力の優なるものは勝つべき事優勝劣敗の示す所にして吾人は此原理に依り我兵力を以て奇撃を敵の先頭に加ふるにあり、即ち之を丁字戦法と云ふ、是れ単列対単列の戦法なり、然れども敵が拙なる運動をなさざる限りは斯る有利なる丁字の戦勢を得る事難し、之を以て戦闘の初期にありては勢ひ正を以て力争し敵に虚を生じたる時機を失せず丁字を画くの外途なし、故に遠戦に於ては正を以て合し近戦に於て敵の虚を生じたるに乘じ初めて丁字を画く可きなり、

丁字の対勢に於て困難なりとする所は此の対勢を長く保持するの途是なり、之れが保持の途は適當の時機に於て八点或は十六点の斉動を行ふか或は又減速運動をなすによると雖も前者にありては兎角列乱れ易く（殊に横陣なるとき）又此運動を行ふ間に敵も亦適宜の運動をなすときは戦勢の変化すべきも急速之れに応ずる能はざるのみ

ならず斉動をなして逆列となるときは長官の素志と部将の意志と相  
 隔絶し部将の運動にして適當ならざるときは其後の行動に大に影  
 (差) 嚮を及ぼし主将も意の如き運動をとる能はざるの不利なきに  
 あらざるが故に平素訓練周到ならざる可からず(現に日本海海戦に  
 於て逆列となりたるとき部将は主将の意のある所を解せず無闇に直  
 進せし事ありて東郷提督は再び斉動を行ひ順列(序)に復するの己  
 むを得ざらしめし(ん)事ありしと云ふ)

丁字は正しく丁を画き得る場合甚だ稀なり、必しも正しき丁字たる  
 を要せず、イ字となるも妨げずと雖も我隊の曲(列)となる場合に  
 は其曲度極めて緩なるにあらざれば時に斉動を行ふの時機に際する  
 も之を行ふ事能はざる事あり、故に敵前に於て正面を變ずるには出  
 来得る限り一点二点との角度に(を)止め且つ如何なる場合にも四  
 点以上を行はざるを要す、

敵を個々に破るは戦術上の要義にして即ち優勝劣敗の兵理の教ふる  
 所なり、丁字戦法は此要義より生じたるものにして一旦敵に丁字を  
 画き得たるに於ては砲火を敵の翼端に集中するを要す、戦術上の見  
 地よりせば列端は最も薄弱にして且つ概ね我隊の諸艦より最も近距  
 離にあり、而して其列端にして敵の先頭ならんには主将の坐乗する  
 ありて此一艦に集弾破壊するを得ば敵の頭脳を打破せるものにして  
 敵の後続諸艦は目前に其惨状を睹るが士気の阻喪を来たさしむる事



最も大に且つ又友艦にして之を援ふが為に不利の不運をとらしむるに至る可き事蔚山の海戦に於けるが如く或は又其進退の自由を失ひて延いて全艦を錯乱せしむる事黄海海戦に於けるが如くなる可し、然も我は敵の水雷を危懼するを要せず、然しながら必しも先頭と限らず其殿艦たるに於ても之に丁字を画きて集弾し以て一隻宛順次に破壊するの利益は決して少小にあらず、之を砲術上の見地よりするに一艦に集弾すると最近の敵を撰んで各艦個々の目標に向ひ分火砲撃するとは今日尚ほ多少研究の余地ありとするも常に我れ最も近き敵艦を撰ぶときは方位距離の変化は勿論目標は対勢の変ずる毎に変化し従て照尺の調整に暇なく却て射撃の効果を減ずる事なしとせず、然るに列端は目標として指示するに最も容易にして且つ単縦陣に在りては列端最も我に近きを常とするが故に之に集弾するを利とすべし、果して砲術上一艦に集弾を利なりとせば戦術上の見地と相一致し自ら敵を個々に撃滅する事に帰す、されば丁字を画き得ば其列端に集弾し敵を個々に撃破すべきなり、然れども八隻編制の一隊が総て敵の一艦に集弾する事は必ずしも利ならざる場合多し、蓋し2800米突の長さに渉る艦隊が首尾等しく一艦に集弾し得る事難きは勿論にして今日行はるゝ一斉発火式射法に於て八隻が一の目標に向つて之を行ふときは其弾着観測は極めて困難なるべし、風波高きときは殊に然るべきなり、人或は無線電話

を以て艦隊全部の一斉射法を行ふべきを説くあれども今日尚其程度に達せず今日何隻迄一の目標に向つて一斉射法を行ひ得べきやは研究時代に属し未だ断定を得ずと雖も吾人は八隻編成の艦隊にあつて四隻宛敵の一艦に集弾するを適當の処置となす、

(ロ) 単列 (艦隊) 対複列 (艦隊) 戦法

戦法として採るべきは複丁字戦法と云ふ、然れども敵を一にして戦ふ事を要す、均勢或は劣勢のもの複列となすものあらば大なる誤謬にして勢力集中の理に背くものなり、されば複列艦隊は其二隊を合すれば単列艦隊より勢力優大なるべきは勿論なり、故に単列艦隊は敵の両隊をして合せしめず常に其一と戦ふ如く行動する事を要す、而して其一のみに当り得たる場合には単列対単列なるが故に丁字戦法を用ふ、然らば敵を一にして戦ふの方法如何日く敵の両隊を常に同方向に見るにあり、



之と同時に敵と常に同行するに在り又反対に航過するときは敵の両隊は我に乙字を画き得るに容易なりと雖も同行して敵の諸隊を常に同方に見る如くするときには敵乙字を画き我を又撃するの機会を得る事難く彼我的対勢の変化する事少し、単列艦隊が複列と戦ふに当り注意すべきは常に敵の又撃を蒙らざる事を勉むるにあり、若一たび其又撃位置に陥るときは之を脱する事容易ならず、速力優越なる場合と雖も之を脱する迄に致命の損害を蒙むるを免かれず、

(2) 複列艦隊戦法

(イ) 複列 (艦隊) 対単列 (艦隊) 戦法

複列艦隊の各部隊個々が単列の一隊より劣勢なるときには協同動作宜しきを得ざれば個々に破られ易し、例は四隻の二隊が却て六隻の一隊の爲めに敗北する事兵棋の上には屢々見るが如し、然れども十二隻の単隊よりも六隻の二隊となし能く協同動作を採らしむるときは十二隻の一隊よりも操縦自在にして八隻の単隊に対し有利の戦勢を占むるを得べし、

複列の単列に対する戦法は即ち乙字戦法にして敵を又撃するにあり即ち一隊は正撃となり他は奇撃 (襲) となる、抑も正奇の運動には

有形無形の連繫(撃)を必要とす、有形の連繫を欠けば乙字の形を離れ又撃を行ふを得ざるなり、而して乙字を画くには艦隊は速力の優越なるを要す、一たび乙字を画き得たらば是恰も敵に致命の打撃を与へ得べき時機なるが故に全力を傾倒せん事を要す、有形の連繫は乙字を画くに必要なる事見易き道理なり、複列の艦隊にありては有形の連繫のみならず、無形の連繫を必要とす、若し此連繫なければ一旦画きたる乙字より敵を脱し易し、蓋し正撃隊は苦戦の力闘に当るが故に意志の連繫なきときは正撃隊は其苦痛に堪へずして正面を變じ或は斉動を行ひ非戦闘側に避くるに至り折角画き得たる乙字の又撃より敵を脱離せしむ、故に連繫を保つには正撃者は苦痛を忍んで奇撃隊を基準とし其運動に伴(後れ)ざる可からず、我日本海海戦前定められたる戦策中常に第一戦隊を基準と立つるの語あるは全然誤謬なり、複列艦隊が乙字戦法を行ふに準備運動として必要な事左の二(式)件にあり、

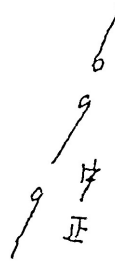
1、陣列をして中正(心)の隊形を保たしむる事

中正とは己れの虚を示さず何れへも偏せざる事恰も劍術に於て

刀(力)を正面中央に構へたる等しきを云ふ、

刀(力)を正面に構へたる場合に於ては敵の働作に応じ如何様

にも吾は之に応じ得るなり、複列艦隊も中正の隊形を構へず併列をなすときは敵が側面に出でたるとき反対側の我が一隊は急遽に之に應ずる能はざるなり、



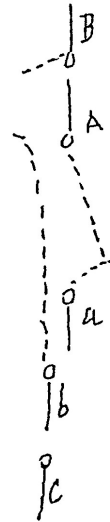
2、速力大なる隊を後尾に列する事

速力大なるもの先頭にあるときは兎角有利なる対勢を占めんが為め其速力を利用して突進したために有形の連繫を欠くに至る事少なからず、為に首尾相呼応して協同働作をなす事困難なり、

(ロ) 複列 (艦隊) 対複列 (艦隊) 戦法

戦法は単列に対すると同じ乙字戦法を用ふ、然れども彼我共に均勢なるときは彼我両者の利とする所相同じ故に機先を制したるもの能く敵を苦しめ虚を生ぜしむる事を得べし、敵若し虚を生ぜば一瀉千里の勢を以て之を攻撃す可きなり、此場合に於ても中正の構をなすは同時に速力優大なるものを後方に列す可きなり、此理は二隊以上

の場合殊に明瞭なり、蓋し一交戦地に於て一の目的に向ひて二隊以上を当らしむる事難し故に第三隊は恰も予備隊の如くなるべきが故に中正の態度にあれば能く戦勢に応じ易かるべし、例へばaがAの先頭を压せんとすればAも亦之に對し平行戦となる、於是b其背後は奇撃を加へんとすればB亦之に應じ平行戦となる可し、



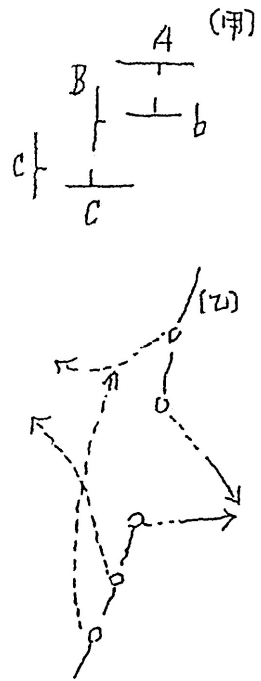
是に於てCは状況に應じ其一に應援せざる可からず然るに今中正の位置にあらずして本隊の右方にあらんか、若し右方の味方に應援すべき場合に迫るも之に應ずる事中正の位置にあるに比すれば容易ならずざる可きなり、又此の場合速力の優大なるべきを要する事は言はずして明なり、  
運動力少なき場合即ち陸軍の如きに在りては甲図の如き対勢となるは勢の免れ難き所なれども運動力大なるものによりては乙図の如く個々戦隊の對抗となる或は二個戦隊の對抗となりて分離する事自然の結果にして従て有形の連繫を失ふを常とす、故に無形の連繫を保持して機を見て再び自隊相合するの行動を採り以て一たび失ひたる有形の連繫を保持するに努む可きなり、

中正の位置を採らざりし為め不利を招きし一例は日本海の役露軍の併列を以て開戦したるもの之なり、  
 惟ふに初め我第三戦隊及第三艦隊を望見したる際単列に復し置く可き筈なるに依然其態度を改めざりし為め我主隊の近づくに及んで倉皇単列を採らんとしたるも機己に遅れ為に大打撃を蒙るに至りたり、

(附言)

決戦を期したるときになすべき準備は、

1、合戦準備 是れ勿論の事にして言を待たざる所なり、而して之れ長官の令すべきものにして艦長は弾薬の供給を十分にし十



2、 分の汽力を保つべきなり、  
乗員に食事せしむ 是れ艦長のなすべき事に属し兵員をして  
脳力を沈静せしむ、

以上二件は戦術上の要求にあらざるが故に必しも長官の採らざるべからざる処置にあらず、艦長に委ねて可なり、而して戦術上採る可き必要なる事項は次の二項なり、

3、 乗員を鼓舞するの手段を採る事 *Trafalgar* に於ける *Nelson*  
の信号の如し、  
4、 已に言ふが如く諸隊の中正の位置に列し速力優太なるものを後方に列する事、

従来屢々長官が適當の距離に入らば打方始めの命令を下すを常とす、然れども之れ砲術上の命令にして当然艦長のなす可き事に属し戦術上の命令にあらざるが故に長官のとり可きものにあらず、



## (第二節) 追撃戦法

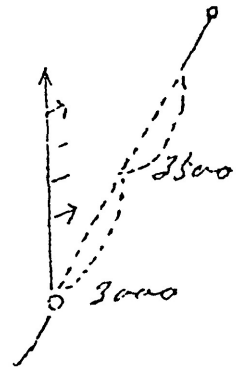
上來述ぶる所は決戦に於ける戦法にして凡そ戦闘は決戦を終るには互に相分るゝ事もあれども戦闘の真目的を達せんには自然一方は追撃となり他は退却となるを普通の事となす、戦闘の始めより退却の意志を以て避戦をなす事ありと雖も茲に論ずる所は決戦後に生ずる追撃及退却に関するものなり、追撃及退却戦を論ずるに当りては単に砲術上即形の上のみに就て之を論ずるを得ず、勢ひ心術上の事は加味せざる事能はず、基本戦術に於て此事を加味するは聊か不当なれども亦己むを得ざるなり、追撃戦は劣者優速なるか或は優者劣速なる場合には起る事なし、優者優速にして初めて追撃戦を生ず、故に追撃戦、退却戦に於ては速力は至大なる関係を有す、決戦後追撃猛烈なれば其効果は偉大にして戦果を収得する實に此時機にありとす、蓋し退却するものは軍規志気共に萎靡し敗走の一念に駆られ其氣自ら困憊して遂に屈するに至る、退却が兎角敗走になり易きを見る事殊に陸軍の戦例に多し、故に勇者は戦果を収むるに此好機を利用すべきなり、惟ふに敗北者には予想す可からざる恐怖心の起るものにして古兵家も此時機を利用し戦果を収めざるは其罪敗走するよりも重しと云へるもの吾人の忘る可からざる金言なり、

然れども目前の小戦果に甘んじて追撃をなさざりし戦例は古來決して少なからざるなり、蓋し収め得べき戦果を収めざる結果は嗣後の戦闘に影響を及ぼす事多大にして日露の役遼陽戦に於ても沙河戦に於ても我兵力十分ならずしてために奉天戦となり更に進んで春慶の戦を必要とする等の場合に至らんとせり、若し遼陽戦(二)沙河戦に於て吾に追撃の余力ありて多大の戦果を収め再び起つ能はざるに至らしめたらんには奉天の戦をなさずして可なりしならん、又日清役に於て黄海海戦の如きも亦松島損傷後は追尾の策に出でずして為めに威海衛の封鎖攻撃を必要とするに至れり、独り日露の日本海海戦は追撃能く其効を奏し露の残艦隊の降服と共に再び海戦を要せざるに至りしなり、故に決戦の戦術と共に追撃戦の攻究を必要とす、追撃は速力の優大を最大要件とす、而して戦艦は一節の速力を増すに約一千噸の排水量の増加を要し其価格実に九十万円を増加す、於是乎、吾人は追撃戦に於ては一等巡洋艦の必要を感ずる事甚だ切なり、

追撃の任務を達するには一等巡洋艦は敵の側方に出づるか或は背後より敵を脅迫して之を擾乱せしめ或は其前路に出で、其退路を変ぜしめ以て其行動を遅延せしめ我主戦隊の追及に便ならしむ、故に此の任に当る巡洋艦の蒙るべき損害多大なるべきは予め覚悟せざる可からず、殊に日没に近き場合には万難を排し惨害をしのいで敵の退

却を阻止するに努めざるべからざるなり、  
夜間艦隊にて敵を追撃する事は困難なるのみならず兎角敵を見失ひ  
且つ敵に駆逐隊を有するときは魚雷を有するが故に夜間は追撃を駆  
逐隊に托し艦隊は其隊を糾合整頓し翌日の戦鬪を準備するを要す、  
夜間は我駆逐艦を用ふるのみならず、通報艦を以て追尾せしめ終始  
触接を保ち敵の所在を確かにせしめ置くときは翌日の艦隊戦鬪を利  
する事大なる可し、  
決戦より追撃に移るときは我隊を整頓するに最も好時機なり、蓋し  
決戦後は我艦隊中或は沈没し、或は落伍し或は又各隊は戦場の各所  
に散在すべきが故に追撃行動中諸隊を整頓すべきは当然の事なり、  
之と同時に今日以後の戦を予想するに全兵力参加し其戦場は広大な  
るべく之を整頓糾合する事容易ならざるが故に大兵軍に在りては追  
撃用として適當の予備隊を置くを可とす、最も絶対に予備隊として  
使用するにあらずして追撃に移る前適當の時機より之を使用するを  
可とす、  
追撃法は砲戦距離に入る迄は最も近路を採り可成早く之に追及し以  
て敵の士気の阻喪に乘じ己に砲戦の距離に入らば其前方に出で丁字  
戦法を行ふを法とす、然れども事情之を許さざれば背後或は側方よ  
り攻撃し敵の退路を変ぜしめ以て主隊の追及するを得せしむるを要  
す、

最捷路を採る事は容易なるが如くにして其実容易ならず是敵が一  
 点の正面変換或は斉動をなす事あるも之を知る事なり其間に距離の  
 隔離を来せばなり、故に敵の先頭艦に向つて追行するを最も簡易な  
 る方法なりとす、最も彼我遠きとき或は殊に彼我一線上にあるとき  
 は先頭艦を見る事能はざるが故に殿艦に向ふ外なし、而して約一  
 五千の距離に入らば側方に出づるを要す、是れ敵の殿艦より発射す  
 る魚雷は五分四十秒の（ ）後三千五百米突の処に來り吾も亦同時  
 間に三千米突（速力十八（ノット））を駛行すべきが故に魚雷の危  
 険なればなり、側方に出でたる後は敵の先方に出づる事を努む可し  
 と雖も此場合敵に勇あれば吾先頭を圧するの運動に出づべし、斯る  
 場合には我は力戦苦闘に陥り敵の先頭に出づるの方針を撤せざるべ  
 からずと雖も同時に我主隊に追及の時機を供する所以なるが故に吾  
 れは暫時敵の圧迫に対する苦痛を忍ばざるべからず、然れども退却  
 者は概ね士氣阻喪するが故に一途に退却を勉め敵は（を）我先頭に  
 圧迫を加ふるの手段に出でざるべし、果して然らば横陣或は梯陣と  
 なり以て敵の殿艦を悩まし以て其退却方面を変ぜしむるを可とす、  
 且つ横陣にあつては我列中に甲種水雷を発射せらるゝも危険を感ず  
 るの度我単縦陣の列中に向てせられたるに比し極めて少なければな  
 り、



兵家或は追撃隊は横陣を以て可とするものあり、然れども砲戦距離に入る迄は寧ろ単縦陣を可なりとす、是れ敵の行動の変化に応ずるに最も容易なる陣形なればなり、敵にして勇あれば追撃者は其先頭を圧迫せらるゝ事あるべきは覚悟す可き事にして之に応ずるの手段は予め考へ置かざるべからず、殊に余り敵に接近せざるを肝要とす然らざれば圧迫を蒙るとき到底其苦痛に堪へざる事あるべし、例へば黄海の役に於ける第二開戦前の対勢に於て露艦隊若し我先頭を圧せば三笠の蒙むる打撃は甚だ大なりしなるべく、従つて浦港に活路を見出し得たるやも未だ知るべからず、露將の戦術に暗かりしか或は之を解するも其勇なかりし乎（は）実に我軍にとりて至大の僥倖なりと云ふべし、

彼我速力相等しきは追撃戦は数理上起る事なし、然れども古来（に）或は其意図をすてしめたために主隊の追撃を完ふせしめたる戦例あり

り、彼の Tragarar の戦に於て脱走したる仏の先頭小隊が英将 Trillon のために全滅せられたるは其適例なり、

追撃戦に於て追撃者は小隊以下に分離別働せしめざるを可とす是れ協同働作を欠き易きが故なり、例へ分離の必要あるも二隻以下即ち各艦自由の運動を以て追撃をなさしむるは最も不可なり、彼の日清戦争黄海の役に於て旗艦松島の損害後各艦各自の随意運動をとらしめたるは戦術上の大誤謬にして此際各艦の鎮遠定遠に向ふものなく、又實際単独之に向ひ得る艦一も有らざりしなり、之れがため長蛇を逸したるは千古の遺憾にして此の時に当り採るべきの所置は先任艦長をして統率せしめ全隊の力を以て敵に当らしむるの手段ならざるべからざりしなり、且又兎角勝戦は人をして意気大に揚がらしめ突飛なる艦長は功名心に駆られ自艦の力を計らずして単独敵に迫り却て不覚をとる事なしとせず艦隊の統率を緩むるは最も戒めざるべからず、

### (第三節) 退却戦法

退却者は劣勢劣速なるが故に早晚追及せらるゝを免かれず、己に追及せられたる場合は奮然決戦をなし出来得るだけの損害を敵に与へ

以て他日の戦闘に利する所あらんとするの覚悟をなさざるべからず  
 退却戦にありては出来得るだけ敵の追撃を遷延せしむるを要す殊に  
 日没既に近きときは或は虎口を脱し得る事なしとせず之をなすには  
 敵の反対方向に一点二点の小角度の正面変換或は斉動をなすにあ  
 り、是れかゝる小角度の変針は敵容易に悟る事なければなり、若し  
 又敵吾れに追及するに至らば奮戦敵の先頭に丁字を画き敵之を避く  
 れば直に反対方向に斉動をなして退却し斯くして敵の追及を遅延せ  
 しめ以て日の暮るゝを待つを可とす退却戦には斉動を用ふる事最も  
 利益あり、兵家或は此点よりして横陣を以てする退却法を称揚する  
 ものありと雖も敵が砲戦距離に迫る迄は *Feixido* なる単縦陣を用  
 ふるを可とす、己に砲戦距離に迫りたる後は斉動を以て横陣を制る  
 を利とする場合多きは疑なし、  
 退却戦に於ては決戦の場合或は追撃戦の場合に比し魚雷を利用する  
 の時機多し是れ敵は概ね我後方において我を追ふが故に水雷に向つ  
 て来る傾きあると甲種水雷は各艦一斉発射（時刻を同ふせざるも可  
 なり）を以てする方各艦各個なすよりも命中公算大なるが故なり、  
 而して一斉発射に斉動を行ふ時機を便とするを便となすが故に退却  
 戦には発射の時機は最も多しとす、  
 然れども艦隊の主兵は砲火にあるが故に之を等閑に附し尚且つ水雷  
 発射をなさんとするが如きは戦術上の誤謬なり、

夜間は退却戦に於ては一針路を固守する事なく三十分乃至一時間毎に変針し以て追尾駆逐隊に対し其跡を晦ますを要す故に敵襲を蒙むるも努めて探海燈を用ふる事なく或は之を用ふるも敵艇退却せば猶予なく之を消すを可とす、又時には通報艦を自隊より遠く側方に出でしめ探海燈を点して敵艇を惑はすも亦良法なるべし、退却戦にありては士氣の阻喪は争はれざる事なるが故に軍規の維持最も肝要なり、海軍に於ては陸軍に於けるが如く収容陣地の如き地形の利用皆無なるが故に平素軍規嚴肅なるにあらざれば兎角乱雑の狀態に陥り易きを常とす、さればよく軍規を維持し各艦の集合整頓に意を用ひざる可からず、乍併此場合に於ては**敢て**（**敵を**）先任後任を論ずるを須ひず各艦速力に整然たる隊形を造り且つ能く之を維持するを足れりとす、

（備考） 雷戦と砲戦との戦法

雷戦を主とするも砲戦を主とするも同行戦にありては等しく丁字戦法を用ふ、只前者は常に敵の先頭にイ字を画き後者は首尾何れに画くも可とするの差あるのみ、  
甲種水雷は万一を堵するものなるが故に一隊の一斉**発射**（**撃**）を可



とする事、既に述ぶるが如しされば将来之に対する規約を設くる事  
 必要なるべし、  
 味方にして単列ならば各艦個々の発射を妨げず且又回轉時(のとき)  
 縦陣にては正面変換等の場合には個々の発射の外に策なしと雖も若  
 し味方にして複列ならば時に或は所在の如何により友隊に危険を及  
 ぼす事なしとせず故に複列戦闘には一斉発射法を用ふるを可とす、  
 勿論艦隊の主兵は砲煩にして魚雷は副兵なるが故に決戦には雷戦の  
 ため針路を変ずる能はずと雖も退却戦には其戦法たる斉動の運動と  
 相待つて魚雷発射を行ひ得るの時機多かるべし、故に決戦には雷戦  
 を生ずる能はずと雖も退却戦には其戦法たる斉動の運動と相待つて  
 魚雷発射を行ひ得るの時機多かるべし、故に雷戦は退却戦に最も多  
 く利用し得る兵器なりとす、  
 雷戦砲戦共に戦法は(に)等しく丁字戦法によると雖も之を利用す  
 るの距離は同じからず、且つ水雷を用ふるとして屢々斉動を用ふる  
 ときは砲力を減ずる事を忘るべからず、

(第四節) 戦闘距離

上來述べ来る所、優勝劣敗の道理に基き決戦の戦法に就きて戦勢を有利に維持するの法をとけり、然れども勝敗の数は戦闘の距離にも関係を有す、尤も勝敗の岐るゝ所は専ら戦勢の(有)利否に存し戦闘距離は武器の進歩に伴ひ一定不変なる能はず、今日の戦艦並に一等巡洋艦に装備する所の武器を基礎として之を論ぜん、

戦闘距離を決すべき要素は次の二点に存す、

- 1、砲煩及魚雷の効力
- 2、隊形

1、大砲を基礎としての戦闘距離

現今主砲は四五口径及四〇口径の十二尹、或は同口径十吋砲にして副砲は四五口径及四〇口径の六(五)吋砲なり、而して前者は貫徹力を主とし後者は爆發力に依頼せざるべからず、

今貫徹力及命中界を表示せば、

# HP 『海軍砲術学校』 公開史料

口径	重量	4000	5000	6000	7000
12"	450	1024	764	884	677
"	410	811	724	677	611
10"	415	5/8	630	727	615
"	410	723	615	571	—

口径	重量	4000	5000	6000	7000	8000			
12"	830	865	827	151	110	829	62	51	41
"	633	294	174	117	84	64	50	39	32
10"	802	388	236	161	120	92	71	56	44
"	40								

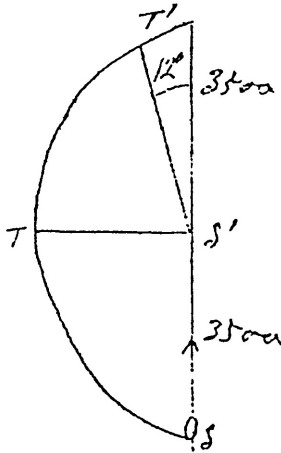
本表は、本標的の高さ、水深、対スルモナナリ

現今甲鉄は六吋より十二吋にして Casemate は五吋乃至八吋にして  
**主砲(力)** の貫徹力より見れば戦闘距離は六千米突以内ならざる可

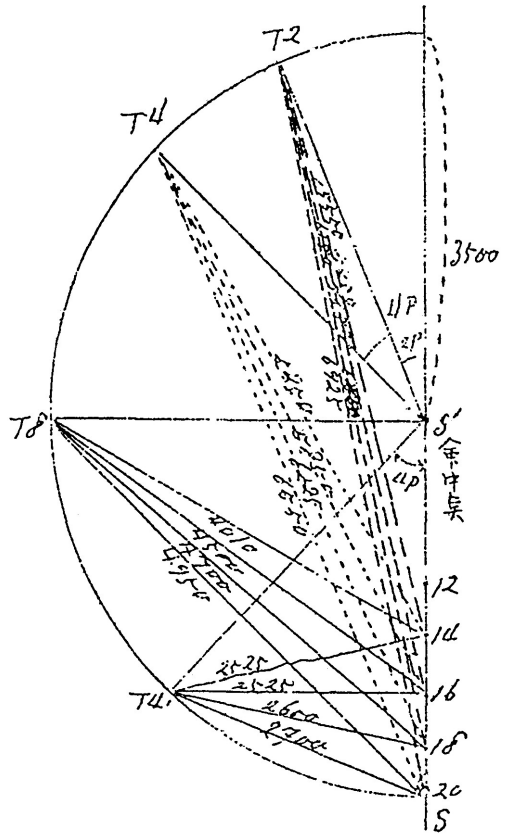
からず、副砲は貫徹力小なるが故に其爆発力を主眼とせざるを得ず、爆発力を主とするからには敢て距離は関係なきが如しと雖も其命中界小なるに於ては命中弾数少きが故に矢張り吋径砲副砲の効力を一様に發揮し得るの利あり、故に将来に於ては副砲の口径を増加し以て両者の命中界を相接近せしむる事必要なり、故に主砲四十口径を用ふれば副砲は四五口径に主砲四五口径を採用すれば副砲は五十口径を用ふるが如き比例を以て其効力を一にせざる可からず、我国の艦船は斯くの如き比例をなさざるを以て此点については大なる不便あり、今主砲副砲の命中界百米突前後(の)差の距離を撰べば敷島型の如き主副砲共に四〇口径のものありては射距離 3000 乃至4000 となる、然れども香取型の如き(主砲四五口径副砲も四五口径)に在て 5000 米突を適當とす、勿論命中界 1000 米突を本論の根拠になしたるに就ては深き理由あるにあらずと雖も此れ以下の命中界にては砲の効果著しく減少すべきが故に便宜上百米突につき云(公)論したるに過ぎず、

2、魚雷の効果よりしたる戦闘距離

新式魚雷（方（「呉」の誤字と考えます）（二号式）は 3500 米突にして有効撃角を有し其速力は 20 節にして有効撃角は 120（？）なり、今艦の速力を 20 節とすれば、にて発射せる水雷は 5m40s 後、にて命中す可し是れ有効発射の最上限なり、而して最も確實なるものは、にて発射せる水雷にして、にて於て直角に命中す、次図の如く魚雷が艦に衝撃する点  $s$ 、前方  $2P$ 、 $4P$  正横の後方  $4P$  に当る  $T_2$ 、 $T_4$ 、 $T_8$ 、 $T_4$  の四発射点より照準点（十四節より廿節の速力に対するもの）に至る距離を算出するとき図記するが如し、



即ち最も奏効確實なる直角衝撃点に相当する発射点「∞」よりの距離4000-5000にして速度14-20節は現今戦場に實際使用せらる可き速度に相当す、故に水雷の効果より見るも戦闘距離を5000米突に定むるを最も効果上確實なりとす、故に兵器の上より見たる戦闘距離は大砲水雷相一致し五千米突を適當となすを得べし、されば吾人は此距離に内外一千米突の余裕を置き四千乃至六千米突を以て現今使用の武器の効力より觀察したる適

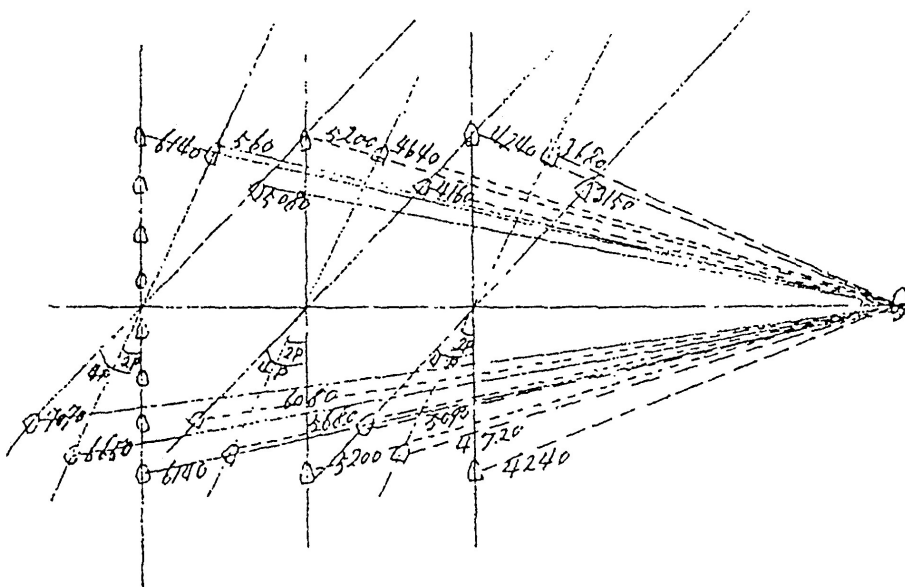


当なる戦闘距離なりと断定せんと欲す、

3、隊形上より見たる戦闘距離

今日に於ける戦闘隊形として撰ぶ所は単縦陣なり、而して八隻編制は現今各国の採るところなれば八隻編制に於ける戦闘基本隊形たる単縦陣の場合に付て考究せんとなす、蓋し八隻の何れをも均一に且つ最大に其砲力を發揮せしめん事は戦闘上主眼の要求にして之を図上より考ふれば次の如し、

図は敵の針路に平行、二点四点の傾角を有する(左)場合の集弾射撃に於ける射距離を示すものにして我隊の中央より敵艦迄の距離の〇〇を撰ぶときは最遠艦は7070にして各艦其砲力を均一に且つ最大に發揮する事能はず(穿徹力表及命中界表により其理由明なり)5000を撰ぶときは最近 4000 米突最遠 5000にして先づ以て砲火の力を最大且均一に發揮し得るを見るべし、  
 されば兵器より見るも隊形上より觀察するも五千の距離は戦闘距離として最も適當なるを知る可し、故に内外に一千の余裕を存し五千乃至六千の距離を以て吾人は近き将来に於ける最も適當なる戦闘距離となすに躊躇せざるなり、





(第五節) 大艦隊の戦法

大艦隊は即ち複列艦隊に外ならざるが故に複列艦隊の戦法を適用すれば足るが故に別に云ふべきものなしと雖も戦闘を開始する迄の準備即ち対勢を制する事に就て数項を添へんとす、蓋し何時にても敵に応じ得るの準備ありて初めて狼狽せざるを得ればなり、

1、非戦列部隊を避けしむる事

戦場に於て戦闘に与かる能はざる艦種を伍するは主将をして之が爲めに頭脳を脳まさしむる事幾何なるか知るべからず、彼の日清戦争黄海々戦に於て西京丸、比叻、赤城の戦場に馳駆したるため当時我長官の苦心は甚だしかりしなるべく比等数艦が苦戦を経て一時光彩を放ちたりと雖も戦術上の見地よりすれば光彩にあらざりて失態とせざるべからず、又日露の役日本海々戦に於ける露將の所置も亦然り、上海沖に於て運送船の数隻は之を放置したりと雖も尚ほ戦場に非戦列部隊を伴ひ之が爲め手縛足縛の苦境に陥りしにあらざりや、之に反して我軍は此海戦に於て第三艦隊を戦場に馳駆せしむる事なく単に戦場掃除の任に当りたるがため主將の苦心を軽減せしむる事な

べからず、此等の諸艦にある将士が勇氣満々たるに係らず戦場の花  
 たらしめざりしは誠に察するに余りありと雖も若し此等諸艦の艦長  
 にして鋭氣禁ずる能はずして戦場に突進し依て以て主将の苦心を増  
 さしむる事あらば是れ即ち戦術上の見識なき艦長にして深く戒めざ  
 るべからず、但し此役に於て仮装巡洋艦が(を)哨戒の任に当りた  
 る事一見此理に戻(悖)るが如きも決して然らず、是畢竟我艦隊の  
 耳目たる巡洋艦の欠乏を補ふに於て己むを得ざる所にして此等の艦  
 種の存亡は予め眼中に置かざりしが故に之が為め我主将の苦痛を増  
 加する謂れなかりしなり、

2、序列と陣形とを立て直す事

敵と逢遭すべき虞ある海上に近くに於ては前衛、側衛、後衛等の備  
 を設警戒の方法をとらざるべからず、日本海海戦に露將此等の警戒  
 に欠きたるは吾人の採て以て戒めとなさざるを得ざる所なり、又何  
 時にも敵の動作に応じ得べき所謂中正の陣列を制らざる可から  
 ず、此の陣列は即ち縦陣列にして若し其縦長にして長に(を)失し  
 首尾呼応に困難ならんには宜しく鱗次縦陣を制るべく且つ呼応の容  
 易なるが為めには快速艦隊を後方に配列せざるべからず、

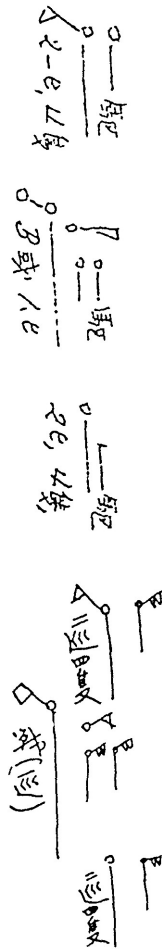
3、 適當の時機に達せば前衛後衛等の警戒諸部隊を集合して戦闘の  
 実施に適當なる位置に配列せしむる事

4、 己に敵と接触し干戈相見んとするに当りては主將は全軍の士氣  
 を鼓舞するの手段を採るを以て乗員をして決死の念を奮起せしむる  
 を要す

兵員には戦略上の目的を予め知らしむるを要せず、仮令我軍は戦略  
 上の目的よりして避戦をなすを要する場合に於ても兵員は勿論下級  
 將校には之を告知する事なく、彼等の如何なる場合に於ても敵と相  
 遇はゞ幸に決死の覚悟を以て戦争に従事せん事を要す、例へば日本  
 海海戦の場合に於て露軍の目的は戦略上可成多数の艦をして血路を  
 開きて浦塩に達せしむるにありとするも、之を部下一般に知らしむ  
 るの必要なきのみならず若し之を知るときは大に兵員の士氣を弛敗  
 し所謂逃げ腰とならしめ却て全力を發揮する事を得ざるに至るべ  
 し、日清の役山路將軍が旅順の攻撃に於て（進め死せよ）の外に云  
 ふ所なかりし事吾人の常に服膺すべき教訓なるべし、

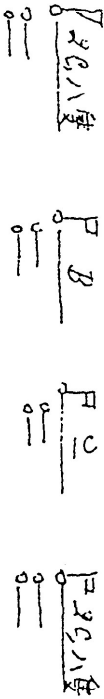
大艦隊の戦法に就ては複列艦隊の戦法を適用すべく且つ敵軍の状態に依り我軍も亦適当に戦闘序列を制るべしと雖も一般に準拠し得べき方法を撰べば吾人の適当と信ずる所概ね次の如し、

1、戦略単位



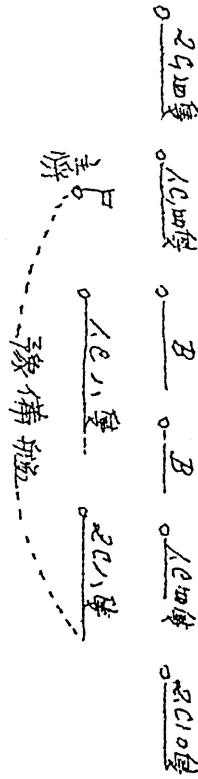
二等巡洋艦を四隻宛に分ち本隊の前後に配置したるは本隊の弱点たる両端を援護し且つ追撃戦の場合に之を利用せんが為なり、

2、聯合艦隊



3、 聯合大艦隊

聯合大艦隊は各別に戦闘せしめんと欲す是れ建制を破る事なく平素の訓練も此建制に依り実施せんが故に意志の疎通容易なればなり、此点に於て秋山教官の説は大に異れり、其配列次の如し、



是れ戦略単位として採るところ各相異なるに依るべし、此序列に於て主戦隊は戦艦隊の二隊なり、而して戦艦の速力は現時各国海軍に於けるもの速力略ぼ相等し故に戦艦隊の二隊をして協同働作を採らしむるに困難ならずとせず、蓋し協同働作をなさしめんには優速なる装甲巡洋艦を用ふる事最も便なるべければなり、

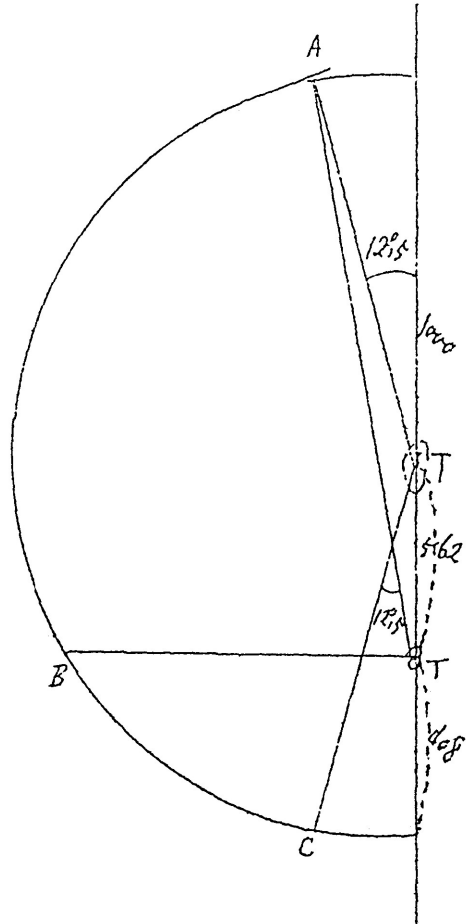
(第六節) 水雷戦隊の戦法

艦隊の主兵は砲煩にして駆逐隊の主兵は魚雷なり、艦隊に於ける砲煩の戦法も魚雷の戦法も己に述ぶるが如く敵の先頭に在るの得策とするの理は亦駆逐隊の魚雷戦法にも適用すべき者なり、今戦法を論ずるに先ち魚雷を有効に使用する事に就き一言すべし、

1、発射艇が敵の正横前にあるときと後方に在るときと何れが発射の機会多きや、

水雷の速力卅二節有効撃(角)  $12\ 1/2^{\circ}$ 。(呉二号式) 有(効) 距離(千) 米突敵艦速力十八として試みに之を図示せばABCの圈上に発射艇位置せるときは撃角  $12.5^{\circ}$  以上を以て有効にTに於て敵艦に命中す、故に発射艇は敵艦Tの正横前に位置する間はATBの角度を有する圈上の何れよりも有効に発射し得べく、正横後にあるときは此角度はBTCに減ず、而して魚雷の速力少なるに従ひBTCは愈小となる故に発射艇は常に敵艦を正横前にあるを要す、

又撃角を有効ならしめんが為め最小有効撃角  $\frac{1}{2}r$ 。以上たらしむれば  $BTC$  は益々小なり、敵の正横後より発射するの愈々不利なるを知る、今之を表示すれば、



撃 術	甲撃		乙撃	
	<ATB	<BTC	<ATB	<BTC
18速	82	68.5	83	19
20	77	47.5	77.5	11.5
25	74	39	76	0
30	71.5	31	70	0
45	61	9	51	0
50	56	0		

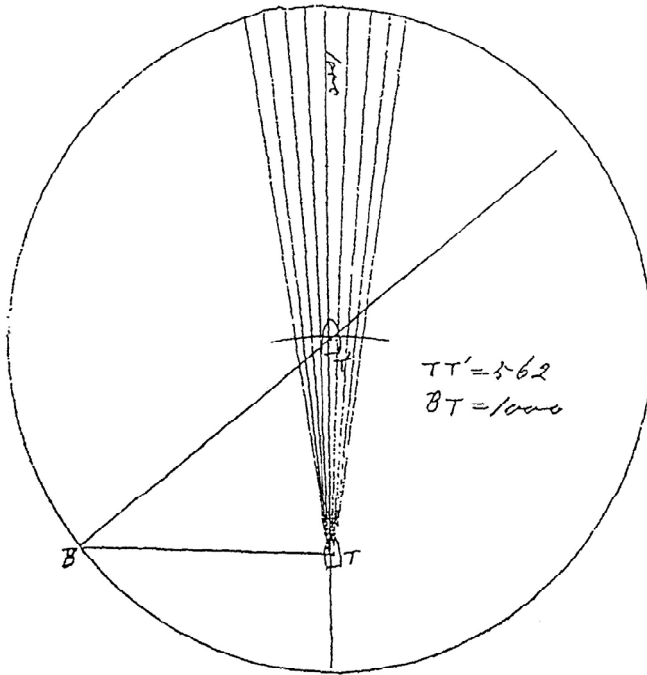
敵艇速度18節  
甲撃 簡速 20節  
primage 3500米  
乙撃 簡速 32  
primage 1000

是故に襲撃者は敵の前方より襲撃せざる可からず、況んや後方よりするときは有効発射位置Cに達するとき敵を距る事僅かに20米突にして（極端なる一例）此距離に達する迄に受くる所の損害は必ず大なる可きに於ておや、

次に如何なる位置より発射するを最も命中の公算多きかを考ふるに前記の乙種水雷の例に依れば正横の位置即B点にあるを最良とす、此場合に於ては敵の速力の誤測二節あるも、針路の誤測内方は二点を外方は約一点半迄有効なり（図を画けば明瞭なり）最も此例は敵艦を十八節と仮定したるものなれば他の速力にては必しもB点が最良



敵の位置にあらざるべけれども各速力に対する図を画けば最良位置は敵の正横附近より発射するの最も命中を算大するを知るべし、



2、駆逐艦水雷艇は甲種を用ふべきや乙種を用ふべきや

日露戦役の実験上甲種を用ふべしとなすもの今日決してあらざる可  
 し然れども白昼は甲種夜間は乙種を用ふるの説なきにあらざる吾人の  
 見る所によれば乙種に限らざるべからず、蓋し甲種は其速度遅くし  
 て潮流海草の如き外部の障害を感じ偏斜を生ずる事大なると敵の速  
 力誤差或は針路変換は忽ち命中に關するも乙種は之に反し比較的  
 も確實なり、最も乙種は敵に接近せざるべからざるが故に乙種を用  
 ふるに就て唯一の問題は襲撃者の決心如何にあり、蓋し敵の反航襲  
 撃するときは彼我の關係速度大なると船体の小なるとに依り受くる  
 所の損害は多大なるものにあらざる事実験に示すところにして且つ  
 有する水雷の数に限りあるが故に勇敢決死の士の必ずや不確實なる  
 甲種を避け乙種を用ひし事を期するべし、況んや白昼と雖も酣  
 戦期には尚ほ襲撃の好機を捕捉し得べきに於ておや、要するに白昼  
 は視界大にして敵艦の砲火猛烈に且つ敵駆逐艦の妨害をも受くべく  
 して其襲撃は困難なるや疑ひなしと雖も然かも襲撃の好機なきにあ  
 らざる以上は最も奏効確實なる乙種を以て襲撃を執行せざるべから  
 ず、而して夜間の襲撃に於て乙種を用ふるは当然の事のみ、

### 3、襲撃の時機

夜間漫然敵を索搜せるは殆んど難事にして夕刻より敵に追尾し其踪

跡を失はざるを襲撃の第一要義とす、而して襲撃を決行するは日の  
まさに暮れて未だ久しからざる後を最も好時機とす、月夜に於ては  
殊に然り、又哨兵の交代時に乗ずるも一良法なるべし、  
然れども襲撃者は敵に接近或は出会せば是れ即ち天与の機会にして  
前記の如き天時の利に迷ふ事なく決然の襲撃を行ひ天与の機会を逸  
すべからず、

4、艦隊は駆逐隊に如何なる位置に伴ふべきか、

敵の先頭に出で得るに最も容易なる位置に置くを要す故に若し二隊  
あるときは其一は我前方に他は後方に配するを可とす、是れ即ち中  
正の位置にして順列逆列に係らず我が先方に位置する隊は敵の先方  
に進出襲撃するの機会を捉へ得べく、我後方に列するものは後衛の  
任を果たし得べし、  
然れども砲撃中艦隊は上記の位置に於て近距離に常に把握する事な  
く適當の時機に之を放たざるべからず、

是より戦法に入らんとす、而して其戦法を分つて次の三種とす、

- |    |      |       |
|----|------|-------|
| 1、 | 驅逐隊対 | 艦隊戦法  |
| 2、 | 驅逐隊対 | 驅逐隊戦法 |
| 3、 | 艦隊対  | 驅逐隊戦法 |

本題に入るに先ち襲撃法の要旨を述べし、

襲撃法の要旨

- 1、敵の針路速力を知る事、
- 2、敵の先方より襲撃する如く其位置に就く事、
- 3、敵の距離を知る事、
- 4、発射終れば敵の砲火を避くる事、

針路の誤測は最も命中の如何を左右す、之に次では速力の誤測なる事言を俟たず、而して敵の針路を知るは敵の後方或は先方にある可とす、敵の方において之を測知するは正確なる方法にあらざれば(ず。されば)針路及速力を知るに最も簡單にして確實なる方法は後方より之れに随行して先づ其針路を知り次に側方に出で平行して進み以て速力を測定するにあり、側方に並んで以て速力を測知するときは概ね正鵠を得、たとひ誤測すとすも一節以上に及ぶ事稀な

りとは実験家唱ふるところなり、己に針路及速力を知らば敵の前方に出で以て襲撃するに容易なる位置を採るを要す、而して敵の先方適當なる位置に就けば敵と反対航路をとり襲撃に向ふべし、斯くして敵近くや最も緊要なる一事は敵の距離を測知するにあり、然れども此事頗る難事にして白昼たとひ距離測定器を用ふるも彼我の關係も容易に其目的を達する事かたかるべし、況んや暗夜に於ておや、是に於てか襲撃艇にありては平素目測に慣練するの外途なきなり、而して砲火の下に目測を以て判定せんとす、人情概ね平然たる能はざるが故に兎角距離よりも近しと考ふるを常とす、されば思ひきつて敵に接近せん事を力むる方規定の距離に入らん事を力むるに比し奏効確實なるべし、

既に襲撃終らば敵の砲火を避くるに最も良好の方向に退却するを要す、此事につきては後節更に詳論すべし、

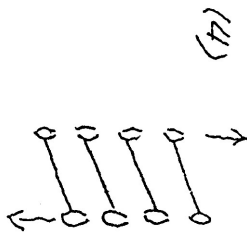
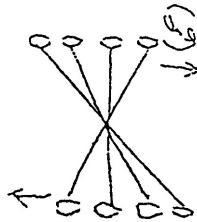
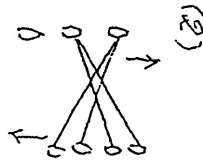
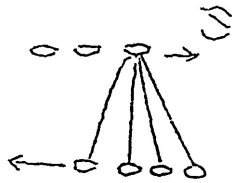
### 1、駆逐隊対艦隊戦法

艦隊の基本隊形は単縦陣を以てする事世既に定論あり、之れに対する襲撃戦法は敵の先方より平行に反航し出来得る限り近距離に肉薄

して攻撃するにあり、蓋し主尾砲火は最も薄弱にして前方より襲撃するときは舷側砲火の猛射を受けざるの利あるのみならず、彼我関係速力甚だ大なるが故に敵は照準困難にして我は損害を受くる事少なく之を後方或は側方より敵に近づき同行発射をなすに比すれば最良の方法なりとなさざるべからず、凡そ**決志(死)**の士と雖も長く砲火の下にあるときは多少恐慌の念を生ずることなしとせず反航発射の利は亦茲にあり、最も反航のときは同行のときに比し発射の時機は一瞬時に経過するが故に一たび此時機を逸するときには再び之を捉ふるに容易ならざるの不利ありと雖も同行発射は其損害多大にして時に或は未だ一発射の好位置に達せざるに先ち撃破せらるゝ事なしとせず、而して平生反航発射の練習を行ひ発射時機を逸せざる様訓練すれば反航発射に於ける此の一不利点を除く事必ずしも不可能にあらず、既に発射位置に入るに及んで二隻宛の対艇に分つべきか、或は一隊のまゝ襲撃すべきか時の状況に依り予め定むる事能はざるべしと雖も理論としては二隊に分れ敵の両側より襲撃するを可とせん、蓋し此れ正奇の戦法を準備せるものにして敵をして避雷運動をなすの余地なからしむればなり、

襲撃目標の撰定については諸説紛々其何れか是なるや未だ遽かに判定し難し其所説の重なるものを挙げれば、

是なり、



(一) 最初に発見したる敵艦を目標とする事、即ち敵の先頭艦を襲撃する事、

(二) 各小隊毎に目標を異にし先頭小隊は最初に発見したる敵に後尾小隊は二番艦を目標とする事、

(三) 各艇各個に敵の先頭より順次に目標を撰ぶ事、

(四) 各艇各個に目標を撰び一番艇は四番艦に二番艦は三番艦に三番艦は二番艦に四番艦は一番艦を(に)襲撃する事、

吾人の信ずる所によれば各艇皆最初発見したる一艦のみを目標とし駆逐隊の一隊で敵一隻を撃沈するの覚悟に出づるを成效上確実なりとす、

如上の諸説皆相当の理由ありと雖も斯る巧妙なる方法が實際砲弾雨飛の下に行ひ得べきや、蓋し此事一考し置かざるべからず、吾人は寧ろ拙速を貴び、敵を見付次第其を目的として各艇皆之に當るを最も簡便なるべしと信ず、敵或は我嚮導艇の襲撃に驚き直ちに變針するあるも我れ若し充分近距離にあるときは殿艇の水雷も尚ほ有効撃角を以て敵に命中するならん、

襲撃者は次の発射の順備を可成速かに整ふるを要す、之が為め発射し終れば直ちに敵弾を脱する方法に出で且つ速かに諸艇の集合をとくべきなり、而して集合点は敵の後方に於てするを最も容易なりとす、

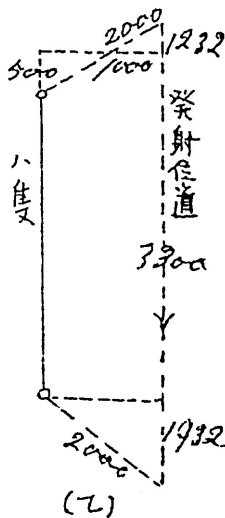
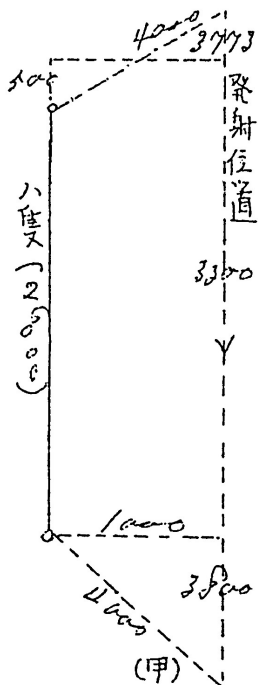
敵弾を避くるには方位距離の變化最も大なる方向に退路を撰ぶを可とす、何となれば敵の照準発射困難なればなり、即ち敵の正横後四十五度の方向に退却するを最も有利とす、最も夜間にありては一時直角に側方に走る事其目標を小にし敵弾を避くるに利ありと雖も白昼襲撃の場合には距離の變化は少なからざるも方位の變化少なきが故に敵の照準は比較的容易ならしむるの不利あり、而して斜後退却法は距離方位の變化前者に比し更に大なるのみならず、多少敵の砲火を我に引受くるの程度丈にして自然牽制となり依りて以て後続艦の襲撃を容易ならしめ得るの利あり、

然れども敵と反航して平行針路に駛るは最も不利なる事図に依りて



明かなり、

退却後は速かに集合を遂げ且つ探海灯を敵方に向けて照らし以て他の僚隊に敵の方向を知らしむるを要す、



(目録解) 甲ハ昼間乙ハ夜間 駆逐艦ハ五節 艦隊ハ十六節 昼ハ四千米突ヨリ夜ハ五千米突ヨリ突見 砲撃手セラルモノトス、

砲撃手時間

(昼間)

8隻... 20分 八分手抄  
 6隻... 25分 七分手抄  
 4隻... 27分 七分四秒

(夜間)

6隻... 4分 19秒 四九秒  
 4隻... 3分 49秒 四九秒

駆逐聯隊の戦法

其戦法又駆逐隊戦法に同じ即ち一隊宛敵に対すれば可なり、勿論両隊は正奇の隊形を以て敵の両側に分るゝを要すと雖も敵に接近する迄は単縦陣をなすを可とす、

水雷戦隊戦法

四隊同時に同一の目標に向つては却て困難なるべきが故に各聯隊毎に分れ時機を異にして襲撃するを可とす、而して一の聯隊襲撃決行の間は他の聯隊は敵の後(複)尾にありて随行するを要す、然れども昼間にありては聯隊相分れて敵の両側より同時に襲撃するを可とす、蓋しかゝる場合に於ては恰も人の蜂に襲はるが如く百方防禦するも遂に蟄刺を免かれざると等しく敵は応接に暇あらざるべし、勿論白昼の襲撃は酣戦期以後に於て母隊の交戦中其掩護の下に行ふべきものとす、

水雷戦隊の旗艦たる通報艦は時機あれば亦自ら襲撃を決行すべしと

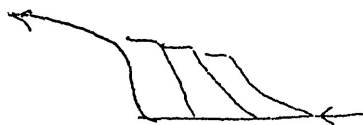
雖も然らざれば襲撃諸艦艇を速に集合せしむるの手段を取るを要す、

特雷を以てする戦法

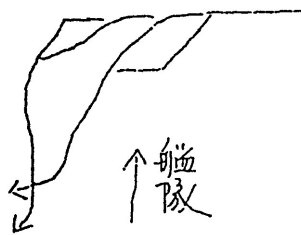
特雷は近時の考案に係り未だ之が使用法に就ては十分の実験を有せずと雖も従来多少の経験と理論上とより論ずれば大要下の如き方法に過ぎざる可し、  
而して今日駆逐艦に特雷のみを積載せば六群連即ち廿四個迄を用意し得べし、  
特雷も亦魚雷と同じく敵の前方より之を散布すべきが故に魚雷と併用する事を得べし、  
今駆逐隊が特雷を同時に布設するものとせば次の三例を生ず、何れの場合に於ても各艦は二点の斉動をなすを要す、而して第一例は特雷布設を専業とせる場合、第二、第三例は魚雷併用の場合にして第三例は二個駆逐隊の作業を示せり、此場合に於ては第二駆逐隊は危険を避くる為め魚雷併用の時機なかる可し、

第四例は一駆逐隊が専用特雷艇を伴ひ駆逐隊は牽制働作をとるものとす、勿論是は白昼の場合なり、此場合に専用艇が敵の先方幾何の距離に近くべきやは成効上に関し至大の問題にして未だ即断する事能はずと雖も三千米突内外には接近する事を得べく又せざるべからずとは先輩の唱導せる所なり、之を要するに昼夜を論ぜず特雷を有効に使用せんと欲せば魚雷と同じく敵に肉薄する事最も必要なり、

第一例



第二例



第三例



2、 駆逐隊対駆逐隊戦法

之を敷衍すれば、

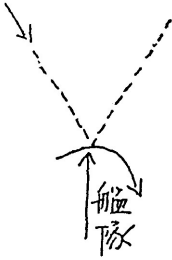
- (1) 駆逐隊対駆逐隊
- (2) 駆逐隊対水雷艇隊
- (3) 水雷艇隊対駆逐隊

の三戦法に區別し得べし、而して(1)は均勢等速巡洋艦隊の戦法に等しく(2)は優勢優速巡洋艦隊対劣勢劣速巡洋艦隊(3)は(2)に反対なれば、戦法としては別論するの要を見ず、恰も一種の小型巡洋艦が小口径砲の砲戦を交ふるに等しかる可し、但し砲戦の外に浅水水雷を併用するの時機あるを忘るべからず、

3、 艦隊対駆逐隊戦法

艦隊は駆逐隊に対して攻撃の姿勢にあるよりも寧ろ防禦の姿勢に在るを常とす、是れ後者は優速にして挑戦避戦共に其掌中にあればなり、最も通報艦或は快速巡洋艦にありては駆逐隊に対し攻勢を取り

之を撃退或は撃沈し得べきなり、  
 駆逐隊に対する艦隊の防禦は一に砲戦を以て其発射するに先ち之を  
 撃沈するにありと雖も戦法として守るべきところは敵の駆逐隊を我  
 が正横より前方に見ざると之を我に接近せしめざるにあり、換言す  
 れば敵が我が正横戦の前方に至らば変針して常にbeam 後に見ると  
 同時に自ら求めて敵に接近せざるにあり、殊に特雷を有する駆逐隊  
 を自ら求めて追撃するが如きは極めて危険なりとす、蓋し我正横前  
 に来る駆逐隊は即ち決死の覚悟をなせるものにして恰も死物狂の野  
 猪に対するが如し、仮令之を射とむる事を得るも時に或は我亦手負  
 の難を免れざる可し、而して之を避くるに当りては正面変換を用ふ  
 れば先登艦は其難を避け得べきも後続艦は危険を免かれざるが故に  
 斉動を用ふるを最良の方法とす、  
 而して変針の程度如何を問はず敵と同行するを最良とす、然れども  
 此事常に行ひ得べきものにあらざるが故に実行上は敵の反対方向に  
 直角なる線を界として其外方（敵に対し）に斉動をなすべきなり、



勿論敵が有効発射位置に入る迄は砲力を以て之を撃退若くは撃沈するを努む可しと雖も昼間尚ほ敵四五千米突の距離に迫る時は其有効発射位置に達するには三四分を出でず（双方の間に）にて反航するとき我艦隊十八動（節の誤字と考えます）敵艇廿五節とせば四千米突なり）故に疾に変針の用意あるを最も肝要とす、而して既に発射位置に入れば出来得る限り発射方向に変針すべきなり、此場合に於て水雷進行方向は同方向にするか或は反行するかは大に其利害を異にす、反航するも撃角不良にして水雷は効力を奏せざるべきも敵艇と我れとの距離の変化甚だしく砲の照準困難なる可きが故に敵艇を撃沈するの見込少なし、然れども同行（で）避進するときは水雷は我を迫進するのみならず敵と我との距離変化少なく砲力利用上大なる利あるべし、

但し夜間に於ては艦隊の斉動は不可能なるべきが故に此の避敵変針法は方向変換の外他に策なかるべし、

夜間は防禦上大砲の外に探海灯を利用するべきなり、而して大砲に關する防禦術は事砲戦術の範囲に属するが故に之を措き少しく探海灯の事に論及すべし、

水雷防禦上、探海灯の利用は露国側の我に優る事大なるを認めざるを得ず、我国に於ては敵未だ見えざるに之を照して光線を旋回し索敵するのみならず敵一たび探照せられて其目的を達せず、退却する

に至るも尚ほ依然として之を減ぜずために他艇の利用する所となる事演習に於て屢々見る所なり、然れども露人は敵の接近を知るに及んで初めて之を照らし敵既に退去して其姿を失ふや突然之を滅して其踪跡を暗ますを常とす、碇泊中と雖も陸上に利用すべき探海灯あれば艦上のもものは之を用ひざるを可とするのみならず出来得る限りは陸上のもも用ふる事なくして寧ろ敵をして我所在を感知せしめざるを得策とす、事少しく此場合とは異なるも彼の黄金山電燈ありしが為め我が閉塞隊は其港口を確かむるに至大の便を得るものにして無用の時機に於ける点灯の害ありて寧ろ益なきを見るべきなり、艦隊が駆逐隊に対するは防禦の姿勢なる事己に述ぶるが如しと雖も、其攻撃に転ずべきものは母隊掩護にある通報艦若くは巡洋艦とす、之れ任務上然るのみならず、天候不良なるか敵の石炭乏しか或は其速力減退せる場合には是非共其覚悟を以て窮鼠猫を嚙むの態度に出づべきが故に其水雷或は特雷に対し之を避くるの用意あるを要す、従て行動を容易ならしめんが為其隻数の大ならざるを可とす、たとひ多くも四隻以上は用ゐざるを利とす、